2-2 官民ボーダーレスまちづくりミーティングの運営

「官民ボーダーレスまちづくりミーティング」を平成 31 年 1 月 28 日（月）に開催し、当日の運営・記録を行った。

（1）参加者について

参加者は 4 会場合わせて 530 人、そのうち約 40%が(官)行政機関の所属となっている。

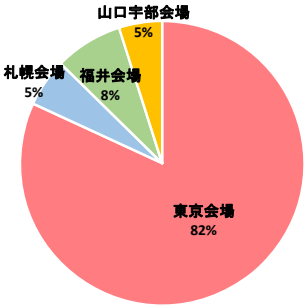
【参加者数】4 会場合計：530 人

東京会場：434 人

札幌会場：29 人

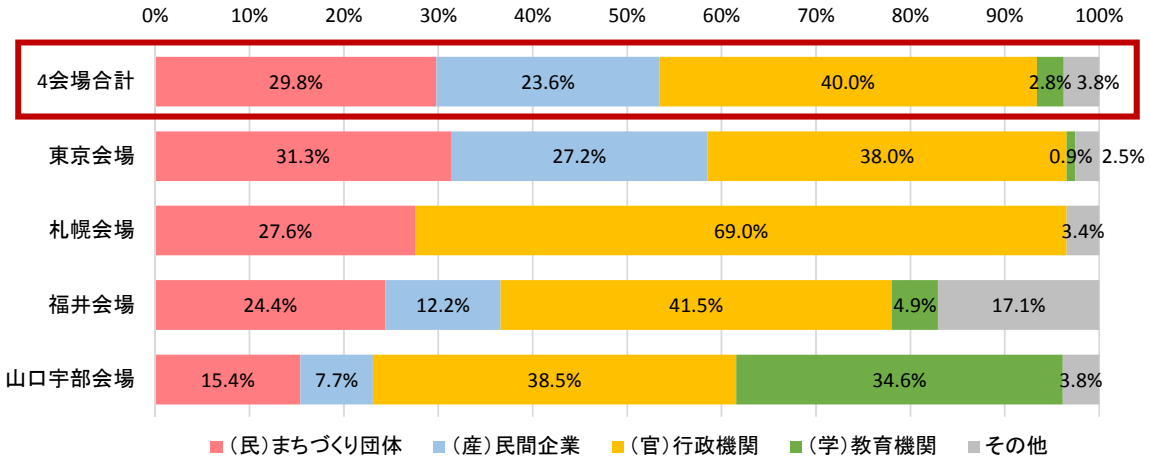
福井会場：41 人

山口宇部会場：26 人



【参加者属性】※当日の受付名簿ベースで集計。所属不明者は「その他」で集計

	来場者数	（民）まちづくり団体	（産）民間企業	（官）行政機関	（学）教育機関	その他
東京会場	434	136	118	165	4	11
札幌会場	29	8	－	20	－	1
福井会場	41	10	5	17	2	7
山口宇部会場	26	4	2	10	9	1
計	530	158	125	212	15	20



（２）コンテンツの成果

■ポスターセッション

＜実施概要＞

ポスターセッション参加団体：全 25 団体（サテライト会場含む）

⇒都市再生推進法人：20 団体　（H30.12 時点の指定団体：50 団体）

⇒新規（H30）指定：12 団体　（H30.12 時点の新規団体：14 団体）

＜結果＞

●平成 30 年に新たに都市再生推進法人に指定された 14 団体のうち、12 団体が参加。

●展示パネルのフォーマットを統一したことで、団体ごとの情報整理ができた。

●最新の情報・取組み事例を発信・共有する機会となった。

■トークセッション

＜実施概要＞

14：40～16：10【 前半 】今を学ぶ・知る

■ 事前アンケート（属性：問 1～6）集計結果

■ 登壇者・サテライト会場からのプレゼンテーション

■ リアルタイムアンケート（問 7, 8）

・あなたの日常生活のなかに、好きな公共的空間はありますか

・その場所は公有地ですか、民有地ですか。

■ バズセッション[5 分]

■ トークセッション（官・民の関係性、それぞれの役割と立ち位置について）

16：20～17：50【 後半 】未来を語る

■ リアルタイムアンケート（問 9,10）

・「民」の方にお聞きします。まちづくりを進めるにあたり、信頼できる「官（行政)」のパートナーはいますか。

・「官（行政)」の方にお聞きします。まちづくりを進めるにあたり、信頼できる「官民」のパートナーはいますか。

■ トークセッション（都市経営の根幹について）

■ バズセッション[5 分]

■ トークセッション（トークセッション前半・後半をうけて）

＜結果＞

●サテライト会場との中継によるトークセッションを通し、具体的な取組みの内容や活動の経緯等を共有・学ぶ機会を設けることができた。

●登壇者ディスカッションを通し、官・民それぞれの関わり方や役割、まちづくり（都市経営）に対する視点や考え方について整理することができた。

●プレーヤーである参加者の“学び”や“気づき”を提供することができた。

（３）事前アンケート集計結果（参加者属性）

参加者属性を調査するための「事前アンケート」を、Web 回答フォームを用いた方法で実施。参加者は受付時に配布された QR コードをもとに、スマートフォン等で各自アンケートへ参加、対応端末を持っていない人については、回答用紙をスタッフが回収し、入力した。開会 5 分前に回答を締切、集計結果はトークセッション内で公表した。

【2010/1/28(月)開催】　官民ボーダーレスまちづくりミーティング

事前アンケート(問1～6)集計結果

	来場者数	回答数	回答率
東京会場	434	－	－
札幌会場	29	－	－
福井会場	41	－	－
山口宇部会場	26	－	－
4会場合計	530	326	61.5%

※Web回答フォームを使用しているため、会場ごとの回答数は集計不可。
※回答締切設定のタイミングのずれにより、当日トークセッション内で表示した数字より回答数が増えている場合がある。

結果概要

■参加者の所属は、(官)行政機関が約40%、(民)まちづくり団体が約31%、(産)民間企業が約22%となっている。

■参加者の性別は、男性が約85%となっている。

■参加者の年齢は、30代が約33%、40代・50代ともに20%前後となっており、比較的若い世代が多いことがうかがえる。

■参加者の居住地は、東京都内・関東ブロックがともに30%前後と多く、その他の地域は10%以下の割合となっている。

■都市再生推進法人等会議への参加が「はじめて」という方が全体の約72%となっており、約28%が複数回目の参加となっている。全参加となる「4回目」は全体の約7%となっている。

■サテライト会場となっている3地域(札幌、福井、山口宇部)のまちづくり団体が活動する場所に「行ったことがない」という方が全体の約67%となっているが、行ったことのある場所としては札幌の「大通すわろうテラス」や「アカプラ」が20%前後と最も多い。

【問1】所属を教えてください。

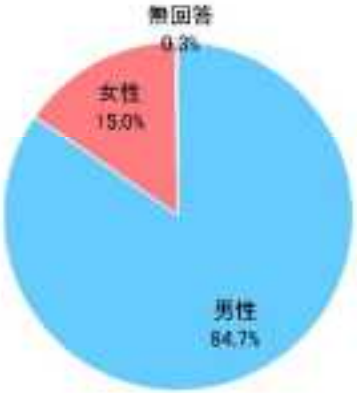
参加者の所属構成は、「(官)行政機関」の方が全体の41.4%を占めており、次いで「(民)まちづくり団体」30.7%、「(産)民間企業」22.4%となっている。

	回答数	構成比
(官)行政機関	135	41.4%
(民)まちづくり団体	100	30.7%
(産)民間企業	73	22.4%
(学)教育機関	4	1.2%
その他	13	4.0%
無回答	1	0.3%
合計	326	100.0%

【問2】性別を教えてください。

参加者の性別構成は、「男性」が全体の84.7%と半数以上を占めており、女性は15.0%となっている。

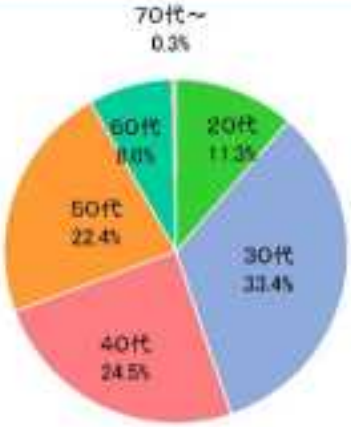
	回答数	構成比
男性	276	84.7%
女性	49	15.0%
無回答	1	0.3%
合計	326	100.0%



【問3】年代を教えてください。

参加者の年代別構成は、「30代」が33.4%と最も多く、次いで「40代」24.5%、「50代」22.4%となっている。

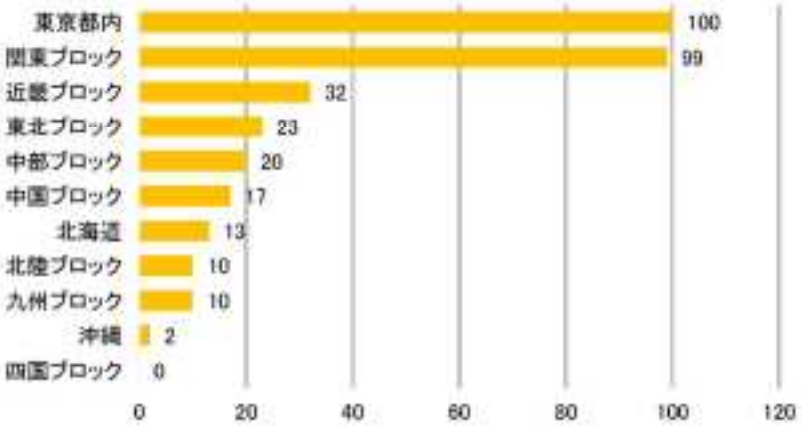
	回答数	構成比
10代	0	0.0%
20代	37	11.3%
30代	109	33.4%
40代	80	24.5%
50代	73	22.4%
60代	26	8.0%
70代～	1	0.3%
無回答	0	0.0%
合計	326	100.0%



【問4】居住地を教えてください。

参加者の居住地別構成は、「東京都内」及び「関東ブロック」が各30%と最も多く、次いで「近畿ブロック」9.8%、「東北ブロック」7.1%となっている。

	回答数	構成比
東京都内	100	30.7%
関東ブロック	99	30.4%
近畿ブロック	32	9.8%
東北ブロック	23	7.1%
中部ブロック	20	6.1%
中国ブロック	17	5.2%
北海道	13	4.0%
北陸ブロック	10	3.1%
九州ブロック	10	3.1%
沖縄	2	0.6%
四国ブロック	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	326	100.0%



【問5】今回のミーティングは、国土交通省が平成27年度から開催している「都市再生推進法人等会議」の第4回目となるものです。今回を含めて、この会議への参加は何回目ですか。

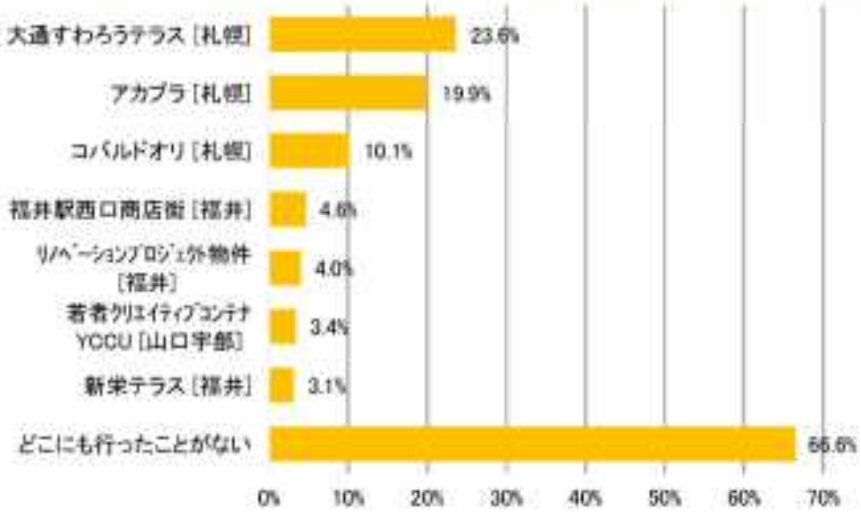
都市再生推進法人等会議への参加回数は、今回を含め「はじめて」が71.8%、全て参加となる「4回目」が6.7%となっている。

	回答数	構成比
はじめて	234	71.8%
2回目	44	13.5%
3回目	25	7.7%
4回目	22	6.7%
無回答	1	0.3%
合計	326	100.0%

【問6】発表予定の3団体が活動されている場所で、行ったことのある場所はありますか。
※サテライト会場の皆様は、今いる会場以外でお答えください。（複数回答可）

サテライト会場先の3団体が活動している場所で行ったことのある場所として、「どこにも行ったことがない」が66.6%と約半数を占めている。行ったことのある場所の中では、「大通すわろうテラス（札幌）」23.6%、「アカプラ（札幌）」19.9%と札幌が多く挙げられた。

	回答数	構成比
大通すわろうテラス［札幌］	77	23.6%
アカプラ［札幌］	65	19.9%
コバルドオリ［札幌］	33	10.1%
福井駅西口商店街［福井］	15	4.6%
ﾘﾉﾍﾞｰｼｮﾝﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ物件［福井］	13	4.0%
若者ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞｺﾝﾃﾅ YCCU［山口宇部］	11	3.4%
新栄テラス［福井］	10	3.1%
どこにも行ったことがない	217	66.6%
無回答	1	0.3%
合計	442	



（４）リアルタイムアンケート集計結果

トーク内容に関連する質問を「リアルタイムアンケート」として、Web 回答フォームを用いて実施。参加者は受付時に配布された QR コード（事前アンケートと同一）をもとに、スマートフォン等で各自アンケートへ参加。集計結果はトークセッション内で公表した。

【2019/1/28(月)開催】　官民ボーダーレスまちづくりミーティング

リアルタイムアンケート(問7～10)集計結果

4会場合計来場者数	530

	回答数	回答率
問7	325	61.3%
問8	370	69.8%
問9	202	38.1%
問10	140	26.4%

※Web回答フォームを使用しているため、会場ごとの回答数は集計不可。
※回答締切設定のタイミングのずれにより、当日トークセッション内で表示した数字より回答数が増えている場合がある。

結果概要

■参加者のうち、約90%の方は日常のなかに「好きな公共的空間」があり、その内訳としては約67%が「公有地」、約25%が「民有地」と回答。

■民の方からみて、約60%の方が信頼できる官のパートナーが「いる」としており、対して官（行政）の方から見ても、約56%の方が信頼できる民のパートナーが「いる」と回答。民・官ともに60%に近い割合で、まちづくりのパートナーが「いる」としている。

■まちづくりのパートナーが「いない」という人は、民・官ともに40%程度となっており、“ボーダーレス”の課題となっていることが分かる。

【問7】あなたの日常のなかに、好きな公共的空間はありますか。

日常のなかに好きな公共的空間があるかについて、「ある」と答えた方が88.9%と過半数を占めており、「ない」と答えた方は11.1%となっている。

	回答数	構成比
ある	361	88.9%
ない	45	11.1%
合計	406	100.0%

【問8】その場所は公有地ですか、民有地ですか。

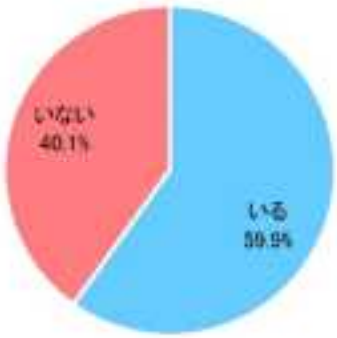
好きな公共的空間について、「公有地」が66.8%と最も多く、「民有地」は24.6%となっている。

	回答数	構成比
公有地	247	66.8%
民有地	91	24.6%
わからない	32	8.6%
合計	370	100.0%

【問9】「民」の方にお聞きします。まちづくりを進めるにあたり、信頼できる「官（行政）」のパートナーはいますか。

"民"の方で、信頼できる"官（行政）"のパートナーが「いる」と答えた方は59.9%と過半数を占めており、「いない」と答えた方は40.1%となっている。

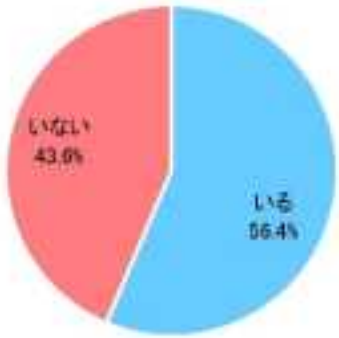
	回答数	構成比
いる	121	59.9%
いない	81	40.1%
合計	202	100.0%



【問10】「官（行政）」の方にお聞きします。まちづくりを進めるにあたり、信頼できる「民」のパートナーはいますか。

"官（行政）"の方で、信頼できる"民"のパートナーが「いる」と答えた方は56.4%と過半数を占めており、「いない」と答えた方は43.6%となっている。
問9の"民"の結果と比較すると、同様の傾向を示している。

	回答数	構成比
いる	79	56.4%
いない	61	43.6%
合計	140	100.0%



（５）終了後アンケート集計結果

満足度・感想等に関する「終了後アンケート」を作成し、まちづくりミーティング終了後に会場にて回収。終了後アンケートについては、回答率を上げるため、Web 回答フォームは用意せず、紙での回答とした。

【2019/1/28(月)開催】　官民ボーダーレスまちづくりミーティング

終了後アンケート 集計結果

	来場者数	回答数	回答率
東京会場	434	231	53.2%
札幌会場	29	20	69.0%
福井会場	41	17	41.5%
山口宇部会場	26	16	61.5%
4会場合計	530	284	53.6%

結果概要

【参加理由】
■まちづくりミーティングへの参加理由として、約69%の方が「トークセッションのテーマに興味があったから」としており、約46%の方が「登壇者(東京会場)に興味があったから」と回答。
■「サテライト会場の取組に興味があったから」を選ぶ割合は東京会場よりもサテライト会場の方が高い。
■参加理由の中の興味のあった登壇者は、「㈱オープン・エー 馬場正尊氏」が約70%、「㈱バルニバービ 佐藤裕久氏」が約62%と、2人への期待度の高さがうかがえる。

【参加した感想】
■まちづくりミーティングの企画の中で、「トークセッション(後半)」がおもしろい・興味深かったといった意見が多い。
■おもしろかった・興味深かった登壇者(東京会場)は、「㈱バルニバービ 佐藤裕久氏」が75%、「㈱オープン・エー 馬場正尊氏」が約52%となっており、参加理由として挙がった2名と同様の結果となっている。

【満足度】
■前半のトークセッションについて、約85%の方が内容に「満足」と回答、時間についても約62%の方が「ちょうどよい」としている。
■後半のトークセッションについて、約86%の方が内容に「満足」と回答、時間についても約67%の方が「ちょうどよい」としている。
■前半・後半ともに過半数の方が内容・時間ともに満足していることがうかがえる。

【新たな試みについて】
■会場参加型のアンケート実施について、約70%の方が「満足」と回答。
■「Webアンケートに参加していない」という方は全体の約5%となっており、その理由としては「対応の端末を持っていないから」が最も多い約64%となっている。

【東京会場参加者の満足度】
■東京会場参加者のポスターセッションを「見た」と回答した約72%の方のうち、約62%の方が「満足」と回答。
■サテライト会場からの中継リポートについて、東京会場参加者の約75%の方が「満足」と回答。
■おもしろかった・興味深かった中継会場として、「山口宇部会場」が約63%と最も高い結果となっている。

【サテライト会場参加者の満足度】
■東京会場・他のサテライト会場からの中継リポートについて、サテライト会場参加者の約57%の方が「満足」と回答しているものの、「やや不満」と回答した方も約15%おり、東京会場参加者と満足度に差があることがわかる。

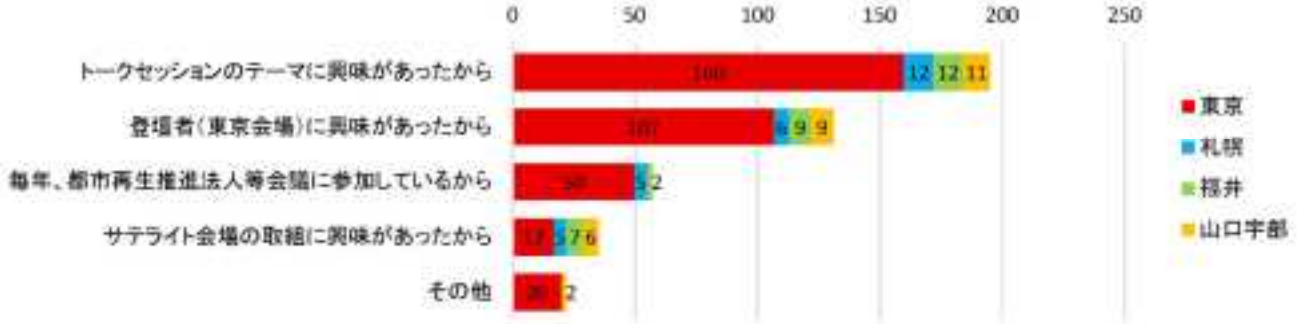
【今後とりあげて欲しい場所】
■地方サテライト会場として、博多や天神などの「九州ブロック」、大阪や和歌山などの「近畿ブロック」をとりあげてほしい人が多い。

【問1】本日の「官民ボーダーレスまちづくりミーティング」に参加した理由は何ですか。（複数回答可）

＜回答対象（アンケート回答者）：284人＞

まちづくりミーティングへの参加理由として、「トークセッションのテーマに興味があったから」が68.7%と半数近く、会場別にみても同様の結果となっている。次いで「登壇者（東京会場）に興味があったから」が46.1%となっている。
「サテライト会場の取組に興味があったから」を選んでいる割合は、東京会場よりもサテライト会場の方が多く、福井会場は特にその割合が高い。
また、「その他」の中には、都市再生推進法人の「指定を目指している・検討している」という方や、「今年度指定されたから」というような方もいる。

	全体		会場別回答数							
	回答数	構成比	東京		札幌		福井		山口宇部	
トークセッションのテーマに興味があったから	195	68.7%	160	69.3%	12	60.0%	12	70.6%	11	68.8%
登壇者（東京会場）に興味があったから	131	46.1%	107	46.3%	6	30.0%	9	52.9%	9	56.3%
毎年、都市再生推進法人等会議に参加しているから	57	20.1%	50	21.6%	5	25.0%	2	11.8%	0	0.0%
サテライト会場の取組に興味があったから	35	12.3%	17	7.4%	5	25.0%	7	41.2%	6	37.5%
その他	22	7.7%	20	8.7%	0	0.0%	0	0.0%	2	12.5%
無回答	3	1.1%	3	1.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合計	443		357		28		30		28	



［その他］ 記述回答（抜粋）

■職場・自治体等からの依頼（4件）

■都市再生推進法人関係（6件）

H30年都市再生推進法人に指定されたから

都市再生推進法人の市役所担当部署として

都市再生推進法人の指定を目指しているから

都市再生推進法人の指定を検討しているから

■まちづくりの参考（5件）

自分のまちづくりに活かせるヒントが欲しかったから

まちづくりに興味がある

■その他（4件）

国交省の新しい取組み、スタンスを体感したかったから

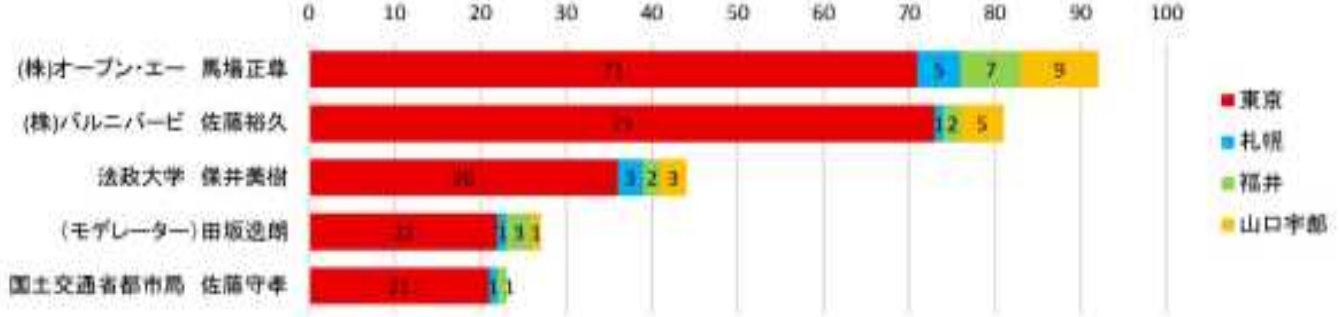
（【問1】で「登壇者（東京会場）に興味があったから」を選んだ方のみお答えください）

【問1-1】興味のあった登壇者を教えてください。（複数回答可）

＜回答対象（問1で「登壇者に興味があったから」を選んだ方）：131人＞

問1で「登壇者（東京会場）に興味があったから」を選んだ方の中で、興味のあった登壇者については、「㈱オープン・エー 馬場正尊氏」が70.2%と最も高く、次いで「㈱バルニバービ 佐藤裕久氏」が61.8%となっている。

	全体		会場別回答数							
	回答数	構成比	東京		札幌		福井		山口宇部	
(株)オープン・エー 馬場正尊	92	70.2%	71	66.4%	5	83.3%	7	77.8%	9	100.0%
(株)バルニバービ 佐藤裕久	81	61.8%	73	68.2%	1	16.7%	2	22.2%	5	55.6%
法政大学 保井美樹	44	33.6%	36	33.6%	3	50.0%	2	22.2%	3	33.3%
（モデレーター）田坂逸朗	27	20.6%	22	20.6%	1	16.7%	3	33.3%	1	11.1%
国土交通省都市局 佐藤守孝	23	17.6%	21	19.6%	1	16.7%	1	11.1%	0	0.0%
無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合計	267		223		11		15		18	

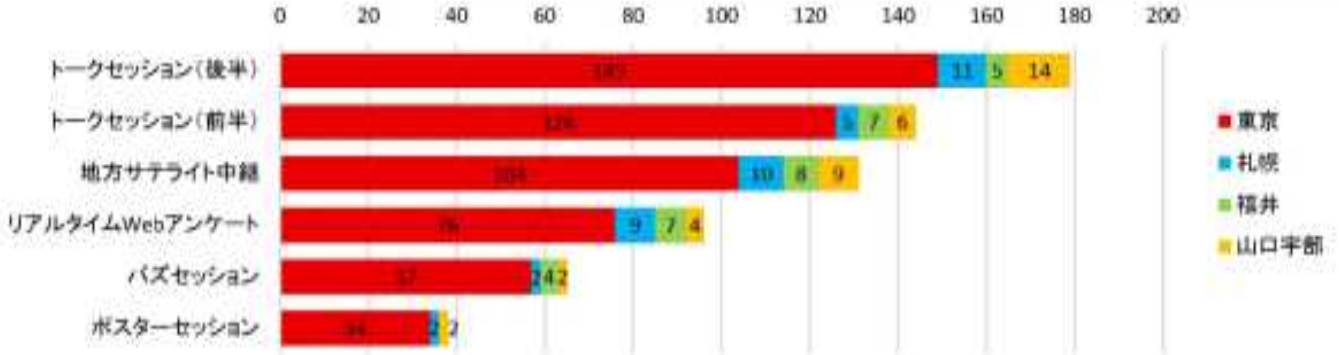


【問2】おもしろかった・興味深かった「企画」を教えてください。（複数回答可）

＜回答対象（アンケート回答者）：284人＞

おもしろかった・興味深かった【企画】については、「トークセッション（後半）」が63.0%と最も高く、次いで「トークセッション（前半）」50.7%、「地方サテライト中継」46.1%となっている。

	全体		会場別回答数							
	回答数	構成比	東京		札幌		福井		山口宇部	
トークセッション（後半）	179	63.0%	149	64.5%	11	55.0%	5	29.4%	14	87.5%
トークセッション（前半）	144	50.7%	126	54.5%	5	25.0%	7	41.2%	6	37.5%
地方サテライト中継	131	46.1%	104	45.0%	10	50.0%	8	47.1%	9	56.3%
リアルタイムWebアンケート	96	33.8%	76	32.9%	9	45.0%	7	41.2%	4	25.0%
バズセッション	65	22.9%	57	24.7%	2	10.0%	4	23.5%	2	12.5%
ポスターセッション	38	13.4%	34	14.7%	2	10.0%	0	0.0%	2	12.5%
無回答	4	1.4%	3	1.3%	0	0.0%	1	5.9%	0	0.0%
合計	657		549		39		32		37	



【問3】おもしろかった・興味深かった「登壇者（東京会場）」を教えてください。（複数回答可）

＜回答対象（アンケート回答者）：284人＞

おもしろかった・興味深かった【登壇者（東京会場）】については、「㈱バルニバービ 佐藤裕久氏」が75.0%と最も高く、次いで「㈱オープン・エー 馬場正尊氏」52.1%、「（モデレーター）田坂逸朗氏」46.8%となっている。

	全体		会場別回答数							
	回答数	構成比	東京		札幌		福井		山口宇部	
(株)バルニバービ　佐藤裕久	213	75.0%	178	77.1%	12	60.0%	15	88.2%	8	50.0%
(株)オープン・エー　馬場正尊	148	52.1%	117	50.6%	11	55.0%	11	64.7%	9	56.3%
（モデレーター）田坂逸朗	133	46.8%	108	46.8%	7	35.0%	10	58.8%	8	50.0%
法政大学　保井美樹	61	21.5%	53	22.9%	5	25.0%	2	11.8%	1	6.3%
国土交通省都市局　佐藤守孝	50	17.6%	44	19.0%	4	20.0%	1	5.9%	1	6.3%
無回答	14	4.9%	10	4.3%	2	10.0%	0	0.0%	2	12.5%
合計	619		510		41		39		29	

■トークセッション（前半：今を学ぶ・知る）についてお聞きします。

【問4】内容はいかがでしたか。

＜回答対象（アンケート回答者）：284人＞

	全体		会場別回答数							
	回答数	構成比	東京		札幌		福井		山口宇部	
とても満足	111	39.1%	99	42.9%	4	20.0%	2	11.8%	6	37.5%
やや満足	129	45.4%	102	44.2%	9	45.0%	10	58.8%	8	50.0%
ふつう	36	12.7%	25	10.8%	6	30.0%	3	17.6%	2	12.5%
やや不満	4	1.4%	1	0.4%	1	5.0%	2	11.8%	0	0.0%
不満	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	4	1.4%	4	1.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合計	284	100.0%	231	100.0%	20	100.0%	17	100.0%	16	100.0%

前半のトークセッションの【満足度】について、「やや満足」が45.4%と最も高く、次いで「とても満足」が39.1%となっている。
会場別にみると、東京会場では「とても満足」と「やや満足」がともに40%を超えており、80%以上の方が満足という結果となっている。
札幌・福井・山口宇部会場においても「とても満足」「やや満足」が過半数となっている。
全会場、「不満」と答えた方はいないものの、福井会場において「やや不満」が11.8%と、他会場と比べて高い割合となっている。
中でも、東京会場が最も満足度の高い結果となっている。

■トークセッション（前半：今を学ぶ・知る）についてお聞きします。

【問5】時間はいかがでしたか。

＜回答対象（アンケート回答者）：284人＞

	全体		会場別回答数							
	回答数	構成比	東京		札幌		福井		山口宇部	
長い	95	33.5%	72	31.2%	10	50.0%	8	47.1%	5	31.3%
ちょうどよい	177	62.3%	147	63.6%	10	50.0%	9	52.9%	11	68.8%
短い	8	2.8%	8	3.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	4	1.4%	4	1.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合計	284	100.0%	231	100.0%	20	100.0%	17	100.0%	16	100.0%

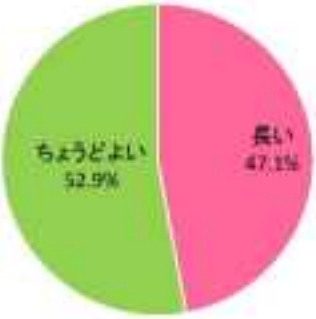
前半のトークセッションの【時間】について、「ちょうどよい」が62.3%と最も高く、次いで「長い」が33.5%となっている。
会場別にみると、東京会場では「ちょうどよい」が63.6%と過半数を占めており、次いで「長い」が31.2%となっている。
札幌・福井会場では「長い」と「ちょうどよい」が概ね半数で対比しているのに対し、山口宇部会場では「ちょうどよい」が68.8%と過半数を占め、東京会場と同様の傾向を示している。

全体

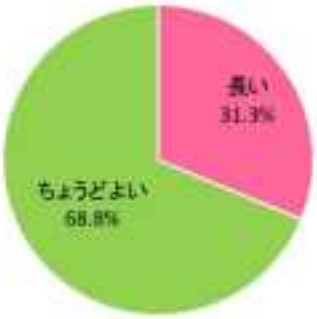
東京

札幌

福井



山口宇部



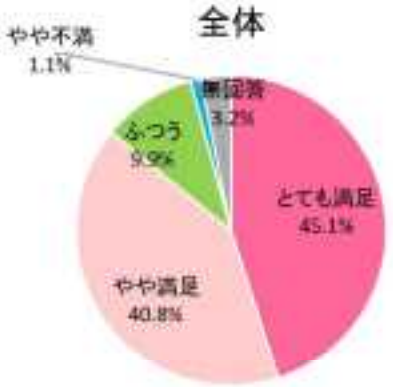
■トークセッション（後半：未来を語る）についてお聞きします。

【問6】内容はいかがでしたか。

＜回答対象（アンケート回答者）：284人＞

	全体		会場別回答数							
	回答数	構成比	東京		札幌		福井		山口宇部	
とても満足	128	45.1%	111	48.1%	5	25.0%	5	29.4%	7	43.8%
やや満足	116	40.8%	94	40.7%	7	35.0%	7	41.2%	8	50.0%
ふつう	28	9.9%	18	7.8%	7	35.0%	2	11.8%	1	6.3%
やや不満	3	1.1%	2	0.9%	1	5.0%	0	0.0%	0	0.0%
不満	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	9	3.2%	6	2.6%	0	0.0%	3	17.6%	0	0.0%
合計	284	100.0%	231	100.0%	20	100.0%	17	100.0%	16	100.0%

後半のトークセッションの【満足度】について、「とても満足」が45.1%と最も高く、次いで「やや満足」が40.8%となっている。
会場別にみると東京会場では「とても満足」と「やや満足」がともに40%を超えており、80%以上の方が満足という結果となっている。
福井・山口宇部会場においてもともに70%以上の方が満足する結果となっている。
サテライト会場では 、山口宇部会場が最も満足度の高い結果となっている。



■トークセッション（後半：未来を語る）についてお聞きします。

【問7】時間はいかがでしたか。

＜回答対象（アンケート回答者）：284人＞

	全体		会場別回答数							
	回答数	構成比	東京		札幌		福井		山口宇部	
長い	72	25.4%	56	24.2%	8	40.0%	3	17.6%	5	31.3%
ちょうどよい	189	66.5%	158	68.4%	10	50.0%	10	58.8%	11	68.8%
短い	12	4.2%	9	3.9%	2	10.0%	1	5.9%	0	0.0%
無回答	11	3.9%	8	3.5%	0	0.0%	3	17.6%	0	0.0%
合計	284	100.0%	231	100.0%	20	100.0%	17	100.0%	16	100.0%

後半のトークセッションの【時間】について、「ちょうどよい」が66.5%と最も高く、次いで「長い」が25.4%となっている。
会場別にみると、東京会場では「ちょうどよい」が68.4%と過半数を占めており、次いで「長い」が24.2%となっている。
札幌・福井・山口宇部会場においても「ちょうどよい」が過半数を占めており、東京会場と同様の傾向を示している。
一方で、「短い」と答えた方の割合は札幌会場が最も高くなっている。

全体

東京

札幌

福井

山口宇部

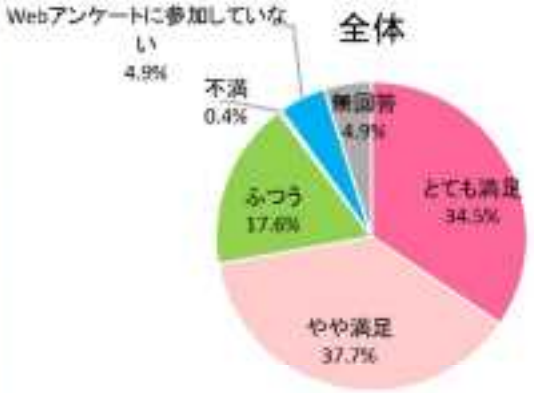
■Web回答フォームを利用したリアルタイム会場アンケートについてお聞きします。

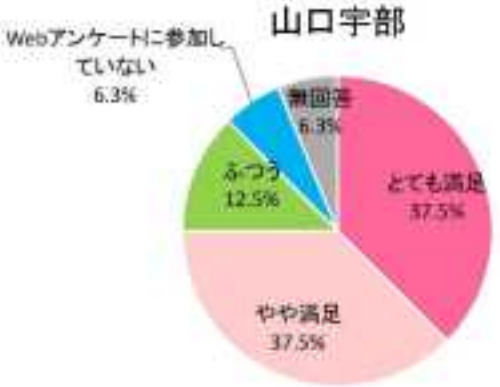
【問8】Web回答フォームを利用した会場参加型のアンケート実施はいかがでしたか。

＜回答対象（アンケート回答者）：284人＞

	全体		会場別回答数							
	回答数	構成比	東京		札幌		福井		山口宇部	
とても満足	98	34.5%	82	35.5%	6	30.0%	4	23.5%	6	37.5%
やや満足	107	37.7%	84	36.4%	10	50.0%	7	41.2%	6	37.5%
ふつう	50	17.6%	41	17.7%	3	15.0%	4	23.5%	2	12.5%
やや不満	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
不満	1	0.4%	1	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
Webアンケートに参加していない	14	4.9%	11	4.8%	0	0.0%	2	11.8%	1	6.3%
無回答	14	4.9%	12	5.2%	1	5.0%	0	0.0%	1	6.3%
合計	284	100.0%	231	100.0%	20	100.0%	17	100.0%	16	100.0%

リアルタイム会場アンケートの【満足度】について、「やや満足」が37.7%と最も高く、次いで「とても満足」が34.5%となっている。
「Webアンケートに参加していない」割合は全体の4.9%となっている。
会場別にみると東京会場では「とても満足」と「やや満足」がともに35%を超えており、70%以上の方が満足という結果となっている。
札幌・福井・山口宇部会場においても東京会場同様、半数以上の方が満足という結果となっている。





（【問8】で「Webアンケートに参加していない」を選んだ方のみお答えください）

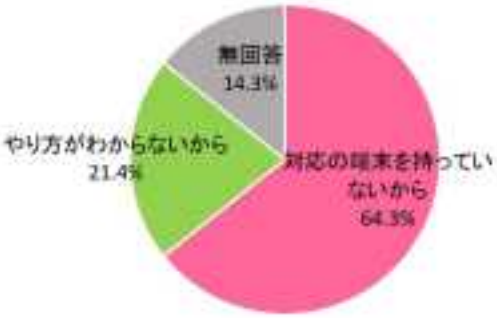
【問8-1】Webアンケートに参加していない理由を教えてください。

＜回答対象（問8で「Webアンケートに参加していない」を選んだ方）：14人＞

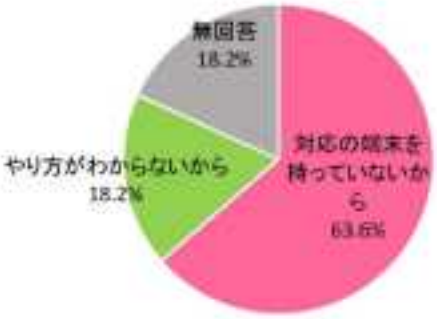
	全体		会場別回答数							
	回答数	構成比	東京		札幌		福井		山口宇部	
対応の端末を持っていないから	9	64.3%	7	63.6%	0	－	1	50.0%	1	100.0%
電波状況が悪いから	0	0.0%	0	0.0%	0	－	0	0.0%	0	0.0%
やり方がわからないから	3	21.4%	2	18.2%	0	－	1	50.0%	0	0.0%
面倒くさいから	0	0.0%	0	0.0%	0	－	0	0.0%	0	0.0%
無回答	2	14.3%	2	18.2%	0	－	0	0.0%	0	0.0%
合計	14	100.0%	11	100.0%	0	0.0%	2	100.0%	1	100.0%

問8で「Webアンケートに参加していない」を選んだ理由として、「対応の端末を持っていないから」が64.3%と最も高く、次いで「やり方がわからないから」が21.4%となっている。
会場別にみると東京・札幌・福井・山口宇部会場全てにおいて「対応の端末を持っていないから」が過半数となっている。

全体



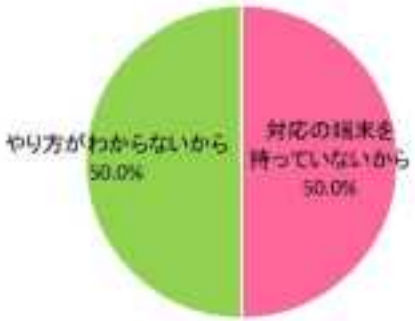
東京



札幌

回答者なし

福井



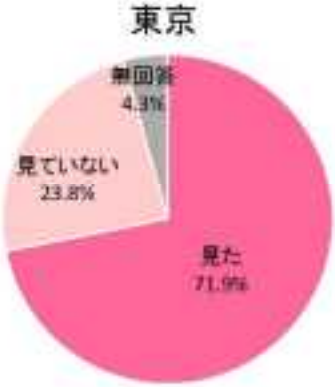
山口宇部

■ “東京会場” に参加された方のみ、お答えください。

【問9】ポスターセッションはご覧になりましたか。

＜回答対象（東京会場参加者）：231人＞

東京会場で開催のポスターセッションについて、「見た」は71.9%、「見ていない」は23.8%となっている。



	東京	構成比
見た	166	71.9%
見ていない	55	23.8%
無回答	10	4.3%
合計	231	100.0%

（【問9】で「1．見た」を選んだ方のみお答えください）

【問9-1】ポスターセッションの内容はいかがでしたか。

＜回答対象（問9で「見た」を選んだ方）：166人＞

問9でポスターセッションを「見た」と答えた方の満足度は、「やや満足」が41.6%と最も高く、次いで「ふつう」が31.9%となっている。

	東京	構成比
とても満足	34	20.5%
やや満足	69	41.6%
ふつう	53	31.9%
やや不満	3	1.8%
不満	0	0.0%
無回答	7	4.2%
合計	166	100.0%

■ “東京会場” に参加された方のみ、お答えください。

【問10】サテライト会場からの中継リポートはいかがでしたか。

＜回答対象（東京会場参加者）：231人＞

東京会場に参加された方で、サテライト会場からの中継リポートの満足度は、「やや満足」が42.4%と最も高く、次いで「とても満足」が32.5%となっており、75%近い方が満足という結果となっている。

	東京	構成比
とても満足	75	32.5%
やや満足	98	42.4%
ふつう	28	12.1%
やや不満	9	3.9%
不満	0	0.0%
無回答	21	9.1%
合計	231	100.0%

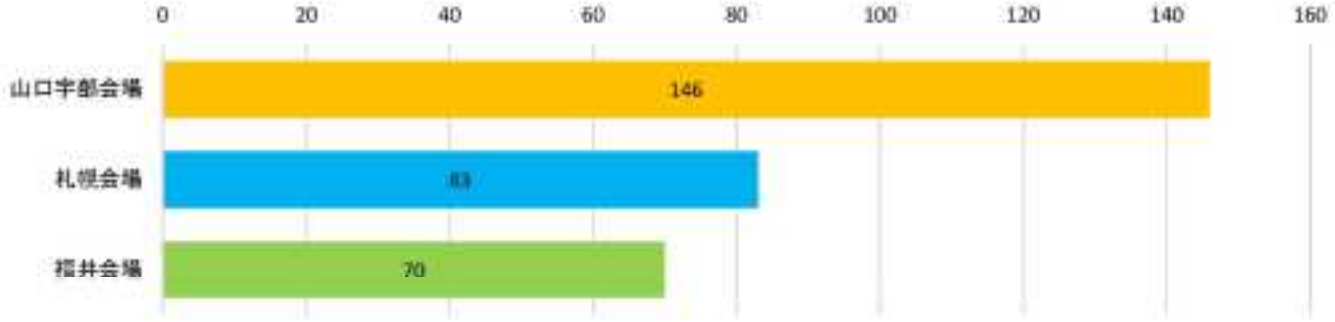
■ “東京会場” に参加された方のみ、お答えください。

【問11】おもしろかった・興味深かった中継会場はどこでしたか。（複数回答可）

＜回答対象（東京会場参加者）：231人＞

東京会場に参加された方で、おもしろかった・興味深かった中継会場は、「山口宇部会場」が63.2%と最も高く、次いで「札幌会場」35.9%、「福井会場」30.3%となっている。

	東京	構成
山口宇部会場	146	63.2%
札幌会場	83	35.9%
福井会場	70	30.3%
無回答	37	16.0%
合計	336	



■ “地方サテライト会場” に参加された方のみ、お答えください。

【問12】東京会場や他のサテライト会場のリポートはいかがでしたか。

＜回答対象（サテライト会場参加者）：53人＞

地方サテライト会場に参加された方で、他会場のリポートの満足度は、「やや満足」が47.2%と半数を占めており、次いで「ふつう」が20.8%、「やや不満」が15.1%となっている。

	サテライト会場	構成比
とても満足	5	9.4%
やや満足	25	47.2%
ふつう	11	20.8%
やや不満	8	15.1%
不満	1	1.9%
無回答	3	5.7%
合計	53	100.0%

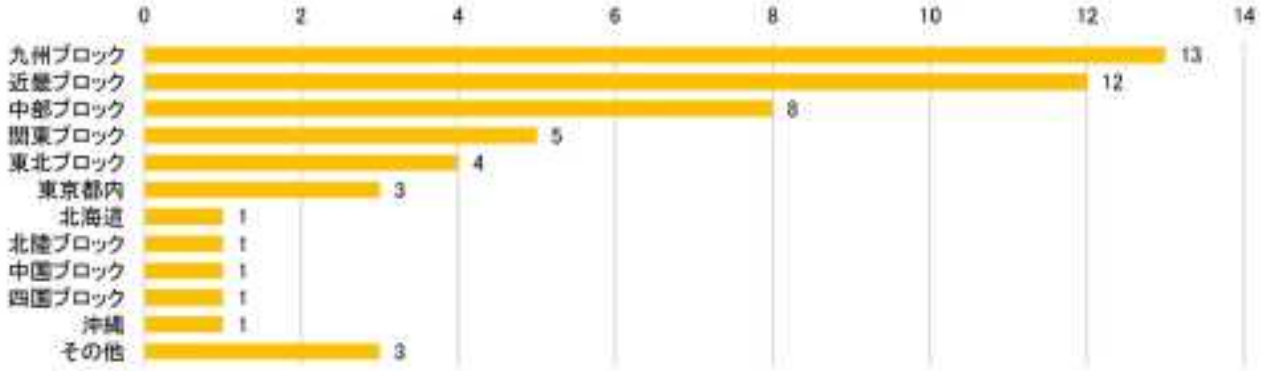
【問13】地方サテライト会場として、とりあげてほしい地域や場所があればご記入ください。（自由記述）

今後とりあげてほしい地域や場所について、九州ブロックが13件と最も多く、「博多」や「天神」など福岡県が多く挙がった。次いで近畿ブロックが12件となっており、「大阪」や「和歌山」が挙げられている。

※記述内容をもとに地方ブロックごとに整理

■東京都内	
吉祥寺	渋谷
東京の中の地方都市（23区外など）	
■北海道	
道内	
■東北ブロック	
東北（2件）	
気仙沼	
女川	
■関東ブロック	
宇都宮市（2件）	飯田
川越	善光寺エリア
■北陸ブロック	
富山市	
■中部ブロック	
豊田市（4件）	
名古屋（3件）	
静岡	
■近畿ブロック	
近畿（2件）	長浜
大阪（2件）	湯浅
和歌山（2件）	北浜
和歌山ぶらくり丁	関西地方のどこか
大阪梅田	
■中国ブロック	
岡山市問屋町	
■四国ブロック	
四国地域	
■九州ブロック	
福岡（4件）	天神（2件）
九州（3件）	日南市
博多（3件）	
■沖縄	
沖縄	
■その他	
これから都市再生推進法人を立ち上げるといったようなところや、興味深い取組みを行うところ。	
海外	いろいろ

ブロックごとの回答数



【問14】その他、本日の感想等ありましたらご記入ください。（自由記述）

※記述内容をもとに類似意見等について要約・抜粋

■シンポジウムの感想

リアルタイムアンケートやバズセッション等、新たな試みに対して「素晴らしい」「面白い」といった高評価な意見が多い。また、「今後の取組みの参考となった」というような意見もあった。

【東京会場】Webアンケート、サテライト中継と新たな試みで素晴らしい会議でした。（類似意見8件）
色々な場所からの生の声が聞けてよかった。とても勉強になりました。
Webアンケート、Buzz sessionはおもしろい取り組み。より会場の声がうまくくみ取れる切り口を工夫してほしい。
県職員です。とても刺激的でした。県はどうしていけばいいのだろうと思いました。
行政職員です。これからのまちづくりに向けた勇気を貰いました。ありがとうございました。
地方会場との連携やリアルタイムアンケートなど新しい取りくみは興味深いものでした。これからの取りくみに対するヒントが多くありました。
本日はありがとうございました。

【札幌会場】今日のミーティングを参考に自分のまちの取り組みにつなげたいと思います。
面白い仕掛けがあり良かった

【福井会場】都市間をつなぐトークセッションや、リアルタイムアンケートなど、新たな試みで面白かった。都市経営や税制のデザインという新たなまちづくりのキーワードも心に入った。

【山口宇部会場】サテライト会場にもっと多くの人が集まってくれると良かったと思います。

■進行について

モデレーターの進行について、ホワイトボードを使用した情報整理等が「素晴らしい」といった意見が多い一方で、その他の登壇者や地方サテライト会場からの発言時間が短く感じた等、時間配分に関する要望意見もあった。

【東京会場】素晴らしい進行や、素早い対応、ホワイトボードを自ら使って整理なさるなど、素晴らしかったです。今回のミーティングをバックアップしていたシステム関係の方々も素晴らしいと思いました。（類似意見4件）
もっとパネラーの回答を引き出したり深掘りしてもらいたい。4名のコメンテーターの話をもっと聞きたかった。（類似意見3件）

【福井会場】地方会場の発言時間が少し短く感じます。

■トークセッション・テーマについて

東京会場5人の登壇者の議論について、「刺激を受けた」「面白い」という意見がある一方で、議論の内容に付随する制度・手法・協働のあり方・仕組みについてなど、更に「掘り下げた内容で議論できると良い」というような意見も複数あった。

【東京会場】素晴らしい内容でした。
東京会場からも、事例報告があるとよかった。新たな取組へのチャレンジは良いことです。
最後のあいさつの中で、自分が住んでいる（働いている）場所にいるだけでは、今の動きについていけない、という言葉があり、本当にその通りだと思った。また、トークセッションの中で出てきた「みんなの為のまちではなく、私が好きなまちから始まる」という言葉はとても興味深かった。行政は待っているだけではダメだと改めて思いました。
サテライト会場のスピーカーがどういう立場の人なのか、分かりにくかった。
「民」から「公」へ"鎌倉資本主義"の話は面白い！官民ボーダレスに相応しいと思います。
とても刺激を受けました。おもしろい話が多かったので、それを成り立たせている制度、手法や、トークセッションの中で出た疑問を掘り下げて詳しく知りたかったです。（類似意見4件）
既に推進法人として、あるいはそれらを支える自治体の方々のミーティングであったかと思われますので、もう一段上、もう一歩二歩も先の協働のあり方、仕組みについてディスカッションされれば良かったと思います。最終のまとめが協働がまちづくりの原則・基本みたいになってしまったのはもったいないと思いました。
おもしろい企画だと思ったが内容（ストーリー）にはもう一つ工夫が欲しかった。
様々な立場の登壇者が一緒の場でオープンに議論されていたことが本当に良かったですし、今後も続けてほしいです。
大変興味深かった。サテライト会場からのコメントなど参考になった。

【札幌会場】大都市と地方の問題、エリマネの動機が異なるため、議論の深掘りという意味ではもう一歩の感がある。

■会場・設備等について

中継に関する音声・映像不備等について各会場ともに「改善してほしい」という意見が複数あり、また、福井会場においては椅子や照明等の会場環境に関しての意見があった。

【東京会場】音声が聞き取りにくく、内容の紹介も時間が限られ不透明な感じを受けた。
会場が前半が暑く後半寒かった。会場は立地も部屋もgood いろいろおもしろい取組でした！
【札幌会場】サテライト会場企画は面白い。ハードウェアの向上を期待したい
Webでつなぐ試みとしては良いが、ところどころ音とびや映像不備があった。（類似意見1件）
【福井会場】登壇者の声が聞こえない事がありました。マイクか通信機器か話し方の問題か原因はわかりませんが改善してもらえると嬉しいです。（類似意見1件）
会場（東京）のホワイトボードをWeb上で共有できるようにしてほしいです。
会場設定の趣旨は理解できるが、イス、照明には無理があった。（類似意見1件）

■今後の希望・要望

「地方をメイン会場として会議を行ってほしい」との意見や、「公共的空間で最もハードルの高い道路・交通管理者や自治体もトークセッションに参加してほしい」という意見があった。

【東京会場】参加者所属や属性が分かるようにしてもらえれば懇親会が活性化する。
公共的空間で最もハードルの高い道路管理者及び交通管理者が参画したシンポジウムを開催してほしい。
フォトセッションが出来る場所もあるといい
積極的な自治体にトークして欲しい。
【札幌会場】公的不動産の証券化をやさしく解説してほしいです。小学生にもわかるように。次回はワールドカフェ形式で。
【福井会場】サテライトでなく地方で本会議が開ければ面白いと思います。（実際に見に行く書っかけにもなると思いますので）（類似意見1件）

■その他

【福井会場】広島の並木通り本町、金座街、そごう村等がエリマネの原点かと思われる。今考えると公共空間活用の原点と思われるが、現在誰も取り上げない。
官民ボーダレスを目指すには民の意識より官の意識や仕組みが変わることを期待したい。リアルタイムアンケートやバズセッションなど参加者もmeetingに参加できるのはとても良かったが、全体的に少し長いと思う。最後の方で集中力が途切れてしまった。

（６）トークセッション記録

開会

●開会の挨拶　　国土交通省都市局長/青木由行

本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。今回、官民ボーダーレスまちづくりミーティングの開催に当たり、ひと言ご挨拶申し上げます。これからのまちづくりを考えていく上で、既に私たちは感じ始めていると思うのですが、人口減少にいかに対応していくかということが大きな課題だと思っています。

人口減少でも、私たちが幸せな生活を続けていこうと考えたときに、いろいろなことを考えなくてはいけないと思うのですが、まち、都市という空間で、いかにイノベーション、生産性、付加価値を上げていくか、そして幸せな生活を送ることができるかということを考えていかなければならない時代なのだろうと思います。それから、人口が減っているということと関係をしてくると思いますが、従来よりも全体としては、開発圧力がどんどん減ってきていると思います。やや行政寄りの言葉かもしれませんが、行政の手段としての規制や、あるいは反対に規制の緩和に加えて、多種多様なまちづくりの手法がどのように展開されていくかが、大きな課題になってくるのだろうと思っています。

そのときに、ボーダーレスは一つの大きなキーワードになるのではないでしょうか。これは、やや個人的な考え方ですが、私はボーダーレスというといつも３つほど頭に置きながらお話をしています。一つは、官民の「空間のボーダーレス」です。恐らく、経済がどんどん成長して右肩上がりのときには、官も民もどんどん空間を増やしていきたいという圧力が非常に強く、逆にそのせめぎ合いのところでどう調整するかというところに、私たちはいろいろな制度、運用というところに意を用いていたと考えることがあります。ただ一方で、近年はそういったことではなくて、むしろトータルに空間の価値を上げていこうということになったときには、それぞれの立場や、それぞれの管理主体などにあまりこだわらずに現場目線で考えていくと、新しい機能を果たしても良いのではないか、あるいは、このような空間機能を組み合わせたら、もっと良い空間になるのではないか、このようなことが全国各地で展開されつつあるのではないでしょうか。

それからもう一つは、官民の「プレーヤーのボーダーレス」ということを、私はよく考えます。官は官の役割、民は民の役割ということが、当然あるのですが、まちづくりとは、官と民のコミュニケーションがいかに上手にいくかというところで、最近の成功事例を見ていますと、そのような思いが強くいたします。例えば、１人のスーパー公務員や、あるいは１人のスーパー伝道師がまちづくりを解決するということは、恐らく違うのだろうと思っています。そういった方々が関わることによって、非常にうまくいくことはあるのかもしれませんが、官と民の垣根を越えて、いかにコミュニケーションができるか、そういったボーダーレスが大事なのだろうと思います。

それから三つ目は、「地域間のボーダーレス」です。地域の価値をいかに上げていくかということが、多くの地域の共通課題だということが、関係者の間で共有されてきていると思います。例えば、大都市に関していえば、かつて非常に開発圧力も旺盛だった時代は、いかに高容積率を確保して、そしてボリュームの大きいプロジェクトをやっていくか、極論する

と、いかに竣工させるかというところに意識がいっていた面もあるのではないでしょうか。ただ近年は、大都市地域でも、そのエリアの価値をいかに保持して、さらに上げていくかというところが課題になっていることは、皆さまがご承知のとおりです。この点においては、大都市も地方都市も、もう課題の質は一緒ですし、そこで必要とされるようなスキル、メソッドをボーダーレス化して共通化しているのではないでしょうか。現にプレーヤーの方も、いろいろなところで関わり始めているのではないかと思います。

以上、申し上げたような問題意識なのですが、まちづくりで活躍をしている方が、いろいろなところで出会って、化学反応が起きて、また新しい動きが出てくるということも、今、全国で起きているのではないかと思っています。本日は4会場で、それぞれまちづくりに関わっている方々にご参加いただくということですし、また後ほどのトークセッションでも、いろいろなお話で、またさまざまな化学反応が出てくるのではないかということを大変期待しています。本日のミーティングが、皆さまにとって次のステップにつながるような、良い意味で刺激に富んだミーティングになることを、期待いたしまして、冒頭の私のご挨拶とさせていただきます。本日は皆さま、よろしくお願します。

イントロ ＋ トークセッション 《 前半【今を学ぶ・知る】》

●モデレーター・コメンテーター・サテライト会場の紹介

司会（橋口）　ありがとうございました。それでは、本日のメインプログラムに入るにあたり、モデレーターとコメンテーターの方々にご登壇いただきます。まず初めに、本日のトークセッションを進行していただきますモデレーター、広島修道大学人文学部講師の田坂逸朗様です。

田坂　よろしくお願いします。

司会（橋口）　続きまして、コメンテーターの産官学民の方々をご紹介します。

まず初めに、株式会社オープン・エー代表取締役、東北芸術工科大学教授で建築家の馬場正尊様です。

馬場　よろしくお願いします。

司会（橋口）　続きまして、株式会社バルニバービ代表取締役社長の佐藤裕久様です。

佐藤裕久　よろしくお願いします。

司会（橋口）　続きまして、法政大学現代福祉学部教授で全国エリアマネジメントネットワークの保井美樹副会長です。

保井　よろしくお願します。

司会（橋口）　最後に、国土交通省都市局まちづくり推進課の佐藤守孝課長です。

佐藤守孝　よろしくお願いします。

司会（橋口）　どうぞ皆さま、お座りください。
続きまして、サテライトの３会場と中継をつなぎ、各地のレポーターの方々をご紹介したいと思います。本日は札幌市、福井市、宇部市の３つの地域の現場から、まちづくりに取り組まれている民間や大学の方々からリポートしていただき、トークを深めたいと思います。まずは札幌会場ですが、札幌会場には、札幌大通まちづくり株式会社の服部彰治様を初め、札幌駅前通まちづくり株式会社、一般社団法人さっぽろ下町づくり社の、３つのまちづくり団体の皆さんがいらっしゃいます。メインレポーターの服部さん、つながっていますか。

服部　聞こえています。よろしくお願いします。札幌大通まちづくり株式会社の服部です。よろしくお願します。聞こえていますか、大丈夫ですか。

司会（橋口）　ありがとうございます。よろしくお願します。
続きまして、福井会場をお呼びしたいと思います。福井会場には、まちづくり福井株式会社の岩崎正夫様がいらっしゃいます。岩崎さん、よろしくお願いします。

岩崎　福井会場です。よろしくお願いします。この会場は３年前にリノベーションされたもので、元はダンスホールです。今日は実際にリノベーションに取り組んでいるメンバーに来ていただきました。どうぞ、よろしくお願いします。

司会（橋口）　よろしくお願します。福井会場のスクリーン右上にミラーボールが映っていますが、少し怪しげなダンスホールの会場から、今日は中継をしてもらうことになっています。よろしくお願いします。
それでは最後に、山口宇部会場を呼びたいと思います。山口大学の小林剛士先生がいらっしゃいます。よろしくお願いします。

小林　山口宇部会場の小林です。私の後ろに見えますのが、今日の会場として使用します2基のコンテナです。皆さまから見て、手前が若者クリエイティブコンテナ、そして後ろにありますコンテナがポレポレカフェということで、現在操業しておりまして、この2基のコンテナを中心に、宇部市の中央町地区のまちづくりについて、大学、地域の方々、そして宇部市、行政と一緒になってこちらで活動しています。そして後ほど、こちらの活動について、山口大学助教授の宋俊煥先生より解説をしますので、本日は、どうぞよろしくお願します。

司会（橋口）　どうぞ、よろしくお願します。みなさまありがとうございます。

以上3会場になります。続きまして、この3会場にも東京会場の様子をお伝えしたいと思います。今、皆さま右手のスクリーンに東京会場全体が映っています。本日東京会場は450名を超える方々にご参加いただいています。この映像が今、サテライトの方にも映っていますので、ぜひ皆さん手を振って、サテライトにメッセージを送っていただければと思います。

（画面に向かって手を振る。）

どうも、ありがとうございました。

それでは全国の会場がつながりましたので、ここからの進行は田坂先生にお願いします。どうぞよろしくお願いします。

●登壇者プレゼンテーション【モデレーター/田坂逸朗】／事前アンケート

皆さん、こんにちは。ファシリテーターという仕事をさせていただいて、いつもはホワイトボードの隣に立っています。座ってやることに慣れておらず、たびたび立ち上がってしまうかもしれませんが、お許しください。無理を言って、後半にホワイトボードを壇上に上げようと思っています。

かなりたくさんの実験を、今日は込めようということで、例えば、このようにサテライト会場を結ぶ、あるいはできるだけトークセッションというものを予定調和的なパネルディスカッションで終わらせない、あるいは、来ていらっしゃるたくさんの皆さんにアンケートを採りながら進める、リアルタイムアンケートというものにチャレンジしてみるなど、たくさんの実験をここに込めています。

官民ボーダーレスという新しい領域に、我々が入っていこうとするとき、皆さんどうぞ、というわけにはいきません。うまくいっていることもあれば、うまくいっていないこともあります。これから、官民ボーダーレスということをテーマにしながら、我々が活動していく上で有益なことが、この会場でたくさんのものが生み出されるのではないでしょうか。この場で生み出されなければ、なかなかそれは予定調和に終わってしまうのではないかということで、実験をたくさん込めて、ここでやっていくことにしたということが、今ここが最先端をつくろうという一つの覚悟です。この覚悟に 4 時間もの長い間、皆さんにお付き合いもらうことになっていますので、どうか、よろしくお願いします。

情報が多過ぎて、頭がパンクしそう、ということはあまり良いことではありません。あるいは、たくさんの事例は聞いたけれども、うちの場合と違いすぎるということもあまり良いこととは思えません。できるだけ、この場で局長のご挨拶にあったような化学反応というものを起こしていきたい、そのような役目を担いたいと思っています。

3 分程度、田坂逸朗がどのような人間かというプロフィールの紹介をすることになっていますが、それに先だって、会場に来ている皆さんのデータを少しだけ紹介します。画面に映せますか。

（事前アンケート結果を表示）

参加者属性は、まちづくり団体が30%、民間企業、あるいは産の領域が22%、それから官の領域である行政機関の方々が41%、学である教育機関の方が1.2%というものが出ています。これは、各会場の入り口でお配りし、開会までに答えていただいた「事前アンケート結果」です。参加人数総勢約500名に対し、約300件の回答をいただいています。その内訳です。

民間のまちづくり団体と、それから民間の企業の皆さんが5割を少し超えた程度です。もしかすると、その立場からの知見と、それから化学反応のあり方を、少し軸足を大きめにとりながら進んでいくのではないかというふうに思います。シンポジウムと名前にすると、もう少し教育機関の方々が多かったのかもしれませんが、シンポジウムという名前でもなく、決起集会、フォーラムという名前でもなく、ミーティングと名乗っています。ミーティングの結果、何かがここで生まれ出ることを期待したいと思います。

もう一つ、男女比ですが、女性が15%も来てくださって、ありがとうございます。きっと、ここから何かが開けていくのだと思います。もしかすると、男性と女性が半々だということを、このアンケートは期待したのかもしれませんが、15%の女性の意見を大切にしながら、8割の男性で頑張りたいと思います。

それから、世代ですが、30代の方、40代の方、それから50代の方というふうに並んでいます。20代の方も11%います。どうでしょうか、皆さんの想像からすると、少し若めという印象はありますか。この全体の方々と一緒に、この会場を過ごしていきましょう。

次に、居住地ですが、東京都内の方が30%程度です。関東ブロックという言い方をすると、東京都内以外の関東の方で30%、それから近畿から9.8%います。

そして、都市再生推進法人等会議への参加頻度ですが、今回初めてという方が72%いらっしゃいます。このシリーズでやってきたところで、今日ここに合流したという多くの方とともに、未来を切り開いていけたらと思います。

私は、ファシリテーターということを名乗ってきました。それから、マーケティングプロデューサーという名乗り方もしてきました。広島修道大学というところは、ファシリテーターとしての知見を活用してくださいということで、期間限定で講師の役割をしています。この4月からは、広島修道大学のご縁で、特に広島県からの要請があって、地域価値共創センターというものが民間のコンサルの中に作られます。そこでの役割をもらうことになっています。

ファシリテーターというと、会議の支援をしたり、あるいはワークショップの司会者をしたりというような方々が、随分と活躍をしていますが、エリアマネジメントのファシリテーターという大変珍しい立ち位置を持っています。地権者の皆さんの話し合いをしていったり、それからグランドデザインをつくっていくワーキングをしたり、あるいは、どうすれば市民や来街者を巻き込んでいけるのかというPRの授業をしたりというところで、ファシリテーションをしてきました。どのように皆で価値を創っていくかという共創価値が大事であったり、成果をどのように見える化していくかということが大事であり、橋渡しをしたり巻き込みをしたりというところで、主に福岡を中心に、We Love 天神協議会、天神明治通り街づくり協議会、あるいは博多まちづくり推進協議会、今はエリマネラボひろしまという活動も始めています。

写真の提供をと思ったのですが、持ってきた写真が全て話し合いの写真で、芝生広場で皆が寝転がっている、馬場先生の素敵な写真に比べますと、ずっと会議室の中の写真が続きます。

これは二つのエリアマネジャーが初めて合同作業をしたもので、調査の報告会もワークショップにしていこうというようなWe Love 天神協議会と博多まちづくり推進協議会の事業です。このようなプロデュースをしました。アクションプランをつくるために、会員の皆さんが検討会をしました。これも博多まちづくり推進協議会の写真です。財界を巻き込んでいこうということで、例えばこれは、福岡地域戦略推進協議会です。地域戦略サミットという名前のワールドカフェをやりました。財界の人が支援をしてこそエリアマネジ

メントだということで、商工会議所メンバーの企業の社長、会長クラスの皆さんで、都心の活性化について話し合っているものです。広島で着手されたものがたくさんあります。この 2、3 年の動きが激しいところです。まずは、勉強からということで、小さな勉強会の輪を徐々に大きくしていく、あるいは本当の街区の価値について話し合おうということで、紙屋町大手町意見交換会のこのような小さな活動の中から、この小さなスタートから 1 年かけてグランドデザインをつくっていくという活動をしてきました。

このような調子で、ファシリテーションとして、人々の意見構成をやってきた立場ですので、本日のテーマに即しても、壇上の皆さんと会場の皆さんで、このテーマに取り組んでいきます。このテーマの紹介の後に、各コメンテーターの方の自己紹介から入っていただこうと思っています。

まずは公共的空間という言葉をテーマにしていこうということが一つです。民有地が 53%、公有地が 31%、河川を除く占有割合です。これが国土全体の割合です。民有地のほうが多い、あるいは河川を含めるのであれば一対一になっているというところが現状です。そのような中、公的不動産が 590 兆円の規模、企業の不動産が 470 兆円の規模になっているというところが、今日のミーティングのベースになっています。これまでは公共空間というものは公共が担ってきました。民間が担ってきたものは単なるビジネスの、私有地での中の話でした。このように分断とまではいかないまでも、別々の空間でした。その真ん中の合わさるところを、公共的空間、あるいは公共的都市空間と呼んでみよう、それが担い手による活性化と制度による後押しがあったときに、どんどん真ん中の公共的な空間が広がっていくことが、まちの価値を高めるのではないかということを主軸に話し合いを進め、後半には、官民ボーダーレスが成り立つのであれば、それは都市経営に向かうはずだという論点を持って、進めていきたいと思います。

では、コメンテーターの皆さんには、日常の中で好きな公共的空間はどこですかというお題に沿って、5 分ずつお話をお願いしたいと思います。「好きな公共的空間はどこですか」、「その空間はどのような空間といえるでしょうか」というところで、馬場さんからよろしくお願いします。皆さん、拍手をお願いします。

●登壇者プレゼンテーション【コメンテーター/㈱オープン・エー代表取締役　馬場正尊】

スライドが 3 枚という制限をいただきました。先週の平日昼間の南池袋公園の 1 シーンです。僕がちょうどミーティングをしていた横で、子どもたちが遊んでいましたので 1 枚写真を撮りました。今、僕は nest という株式会社を保井先生たちと一緒につくって、南池袋公園でマルシェをし、公園のプロデュースの仕事を豊島区から請け負ってやっています。これは南池袋公園の日常です。僕たちは最初、南池袋公園を豊島区池袋にとってのリビングルームにしようということで、このような風景にしました。まさにリビングルームのようになっています。それぞれの人がそれぞれの思いで、こういうものを使っています。ですが、今、南池袋公園は豊島区のプライドにもなっていると思います。この写真を見ると、ここにいること自体が少し誇らしい感じがありませんか。そういう場所になっている、日常のいい風景が 1 枚目です。

2 枚目は、山形です。僕は今、山形にある東北芸術工科大学というところで先生をしています。この本屋さんは、郁文堂書店というのですが、民の空間がパブリックになったと

いう事例です。真ん中にいるおばあちゃんと、周りにいる、僕の研究室の研究生たちが、コラボレーションで、クラウドファンディングで 120 万円を集め、おばあちゃんの本屋さんを再生しました。生徒たちとおばあちゃんが、本屋さんを共同経営しています。そうすると、街中のおじいちゃん、おばあちゃんも来ますし、学生たちがバイトもしているという風景ができて、ジェネレーションを超えて、この空間ではいろいろな人が集まるようになっています。この間は、芥川賞作家の人が朗読会をここでやりたいということも始まったりしています。要するに、民の空間だったにもかかわらず、この関係性が生まれることで、どんどんこの土地がパブリックになっていきました。結果、ここのシネマ通りにそれがにじみ出していて、通り自体が変わろうとするきっかけになったのです。ですので、民の空間がパブリック化されることによるインパクトを、僕はここで感じ、表紙になるという、おばあちゃんは 82 歳になって本の表紙になるなんて思わなかったと言っていましたが、そのような出来事も経験しました。

3 枚目です。沼津の、公園に泊まろう INN THE PARK という宿泊施設です。僕はここのデザインと同時に経営をしています。株式会社インザパークでも社長なのですが、これは沼津市の愛鷹運動公園にある、ほとんどボロボロになっていた少年自然の家を沼津市が民に貸したいということで、プロポーザルになったのですが、僕らが仲間たちと株式会社インザパークという株式会社を作って、沼津市さんから少年自然の家を借りて、今、宿として運営しています。ここの空間はまさに公園の中なのですが、あの白いドームはテントです。球体の中に泊まることができます。公園に泊まろう INN THE PARK は、パブリックな空間を民の僕ら株式会社インザパークが借りて、私たちが自らプレーヤーになって、民間が投資して、この公園を使い倒す宿泊プロジェクトを展開している事例です。

ここで面白かったことは、沼津市にとっても極めて冒険的な試みなのですが、公民連携で沼津市が、これを実現するためのプロジェクトチームをつくって、あらゆる規制緩和や法の解釈などを民と官で一緒に考えて、この風景を実現するに至っています。これは設置許可で、しかも白い球体の公園面積の借地をしています。民と官が同じ船に乗って知恵を絞ることによって、沼津市の公園を再生しています。沼津市としては、『BRUTUS』に載ったり、NHK の『おはよう日本』に取り上げられたり、沼津市にとっては大きなプロモーション効果があって、それは僕たち民にとってもハッピーになっています。このような新しいパブリックのチャレンジを日々やっているという感じです。以上です。ありがとうございます。

●登壇者プレゼンテーション【コメンテーター/㈱バルニバービ代表取締役社長　佐藤裕久】

よろしくお願いします、佐藤です。今、馬場さんは 3 枚とおっしゃったのですが、僕はたくさん持ってきました。時間的には 5 分で収めます。

僕の好きな公共的空間は、隅田川テラスです。実は、我々は東京や各地で食べ物屋をやっています。食べ物屋でまちが面白くなるといいなと、24 年やっているのですが、我々の東京本部が今から 8 年前に、隅田川沿いの蔵前という街にできました。

当時の蔵前は、35 年前ぐらいには国技館があって、それが両国に移動して、本当に何もない、浅草から近いにも関わらず人通りの少ない街でした。僕はもともと京都の生まれですので、川沿いにすごくなじんでいます。京都の人間は鴨川でデートをしま

すし、散歩もトレーニングもします。もっと隅田川は使われるのではないかと思っていたのですが、あまり整備がされていませんでした。ただ、ちょうど工事がされているときでした。僕はこの場所を初めて紹介されて、台東区にやってきて蔵前の物件を見ました。600 坪の 7 階建てのビルでした。その全体で飲食業をやるなど、街中でもあるまいし見当もつきませんでした。

けれども、僕はそこにたどり着いて、隅田川テラスを自転車で走りました。まだ整備途中でしたが、信号なしに 10km 走ることができます。これは東京都内でもレアです。皇居が信号なしで 5km 走れますが、それ以外には都内の中心部ではほぼないのではないでしょうか。片道 5km、往復で 10km、信号がありません。ランナーにとって信号があるということは、自分たちの毎日のアチーブメントが分かりません。何分かかって、この距離を走れるようになったのかが分かりませんから、そのような意味では、非常にいい場所でした。

そして、最後にそのビルの屋上に僕は寝転がって、あまりの気持ちよさに仲介業者に電話をしました。2010 年の 10 月のことです。しかし、600 坪で家賃が月 500 万円の物件を借りることは、僕にとっては大きな賭けでした。賭けですが、確信したことは、自分であればこの場所にカフェがあったら行きたい、今後行こうと思う、ということです。我々がずっとやってきたカフェは、ほとんどそれです。ものすごく良いのに、なぜ置いておくのかというような場所です。

本当に一番好きな場所は家から近い日比谷公園なのですが、日比谷公園には注文があります。誰かを敵に回すかもしれませんが、日比谷公園のキヨスクが 3 個あったうち、1 個は 4 年前から閉めたままでボロボロの状態で置かれていました。恐らく 12 月だと思うのですが、ここ数カ月前に撤去されました。あの広い公園にキヨスクが 2 軒しかないのです。しかも 1 軒は常時開いていますが、もう 1 軒は大体月の半分です。自動販売機は 1 台もありません。あそこに行く人たちは、高くて素晴らしいレストランに行くしかありません。ですが、120 円で飲料を買いたいのです。しかし、それは 1 カ所しか買えません。それは、僕は間違っていると思います。セントラルパーク、ハイドパークには、たくさんの素敵なキヨスクがあります。少しつまみたいときにパンが買えますし、サンドイッチが買えます。そのようなこともあって、あえて皮肉で隅田川テラスを選びました。

「好きな公共的空間はまちの〇〇」と一言で言いますと、まちの風通しです。本当に、そっと北から南へ流れていく川によって、僕は東京の何か淀みや、ときどきある苦しいことや悲しいことを、水面を通して流していってくれるのではないかと思います。僕もつらいときには、会社の 6 階の事務所から川を眺めています。そんな素敵なものだと思います。

我々が作ってきた物件を見てください。これは東京都文京区の小石川です。今や、どんどん郊外に行っている印刷工場の 2 階建ての跡です。2 階建て 350 坪を借りています。このように改装しています。2 階はほとんど使われずに、物置と喫煙所と空調だけになっていました。それが、このようにガーデンテラスになり、これで 10 年程度やっています。累計で 25 億円をこの場所で売っています。小石川の物件の前の通りは大型車は入れない一方通行の道路です。

時間となりましたので、見てもらうだけ見てください。台東区の蔵前にあった、元々CD の配送場所が、僕たちが改装して年間 22 万人が来られるビルになりました。2011 年の地震の直後にオープンしました。これが 7 階です。スカイツリーと隅田川遊覧船が見えています。それから、これが大阪の中之島の公園です。ブルーシートのグランメゾンが建っていたところに公園ができました。それから、この風景は大津市の駅です。寂れてどうしようかという駅です。これは馬場さんも滋賀県の大津市といろいろと関わっていらっしゃいますが、その中で、大津のイメージを変えたというふうに、この間もおっしゃっていただきました。時間をオーバーしましたが、以上です。

●登壇者プレゼンテーション【コメンテーター/全国ｴﾘｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄﾈｯﾄﾜｰｸ会長　保井美樹】

今日は学という立場からまいりました。法政大学で教員をしていますが、今日の主催団体の全国エリアマネジメントネットワークで副会長に就いています保井と申します。よろしくお願いします。

好きな公共空間ですが、私はエリアマネジメントというところから、どちらかというと一つの事業というふうに、地域の中の関係をどのようにつくっていくかというところに焦点を置いて、つくってきました。キーワードは、寛容性という言葉を入れました。今、公園も出ましたが、全国でいろいろな方とご一緒して、素敵な取り組みをたくさんやっていますので、国内のものを1個取り上げることは非常に難しいです。ですので、海外から持ってきました。よく皆さんご存じの、ハイラインというニューヨークにある引き込み線、廃線になった場所がそのまま公園になったという場所があります。ここは何が素敵かと言いますと、自分たちのホームページにも書いてあるのですが、ここはmore than parkと書いてあると思います。単なる公園ではありません。まさに、公園ではなく、街の中でここを育んできた人たちがいて、その人たちが一生懸命に公園にしようという運動をして、そして市民、いろいろな人と関係をつくって支持を得て、そして公園になっているという場所です。このような場所はすごく素敵だと思います。

ロンドンに行くと、クイーンエリザベスホールという、テムズ川の南側にホールがあります。ここを再開発しようとしたときに、地下に、いわゆるスケートボードパークがありました。これを壊してほしくないということで運動を始めた若者たちがいました。自分たちで組織をつくって、お金集めを始めました。1年半後に、これは市と協定を結び、このホールとも協定を結び、このまま公共空間として残していくということが決まり、今でもここは残って、もっと素敵なところになりました。ここも新聞記事には、単なるアーキテクチャーでも、単なるスケートボードパークでもないという表現がされていて、本当にそうだというふうに思いました。

そのような場所は、国内にもいくつもあると思います。例えば、私が最近関わっているところからいくつか出しました。豊田という街に、河川敷で、本当にこれは行政がお金も出さずに、自分たちでやっている音楽祭があります。橋の下世界音楽祭です。これも、単なる河川敷ではないのです。自分たちで音楽祭をつくってきたというストーリーを持って、ここが成立しています。私も学生と、団地の一室で一緒になって、先ほどの馬場さんの話もありましたが、周辺の人たちからみんな持ち寄ってきてもらって、お金も集めて、そして場づくりをして、そのうちにURさんがお金を出してくれて、今は地域の居場所としてカフェになっている事例もあります。

大事なことは、皆のための街をつくろうと最初から思うのではなくて、私がほしい街、ということから始まるのではないかと思っています。そうするとチャレンジする人、それを受け入れて応援する街、この関係をいかにつくっていくか。その中で、仕掛ける人と仕掛けられる人の関係を、まさに田坂先生がおっしゃっていましたが、そのような関係をいかに超えていくか、そのための経験の共有をどのようにしていくかなのではないかと思います。そのときに、地域の中ですごく大事なことは、組織だけではなく、まさに皆1人でやりたいということで縁がつくられていって、多様に入り組んでいくことが、匿名性を大事にする街の姿ではないでしょうか。

今日も札幌会場がありますが、これはすごく素敵なシーンだと思っています。ホームレ

スが本を売っている『ビッグイシュー』の方が、札幌駅前通まちづくり株式会社のインフォメーションカウンターを担ってくれています。実は、このようなホームレスの方とまちづくりが連携をしていくということは、世界的な動きでもあります。このような、いわば、はじき物になっていく誰かと一緒に街をつくっていく、いろいろなステークホルダーが協働していく仕組みが、これこそまちづくり、エリアマネジメントの中で考えていかなければいけないことだと思っています。

もう一つは、エリアマネジメントの話をします。最初に取り上げられるタイムズスクエアです。これは掃除をして治安維持をしてきましたという話から始まっているのですが、今はそのようなレベルではなくなっています。まさにパブリックスペースを生み出して、人がここを安全に動ける、過ごせる場所にしていって、そして今、その先として、ここでどのような過ごし方ができるのか、何が生まれるのかを実験するというふうに、彼ら自身が「今、第3期に入った」と言っています。そのような意味でいいますと、エリアマネジメントの目的はどんどん変わっていきますし、それでいいのではないかと思います。

もう一つ、ブライアントパークを紹介します。これも公園ですが、実はこの公園はBID組織がやっています。エリアマネジメントの組織がやっていることは、皆さんもよくご存じですけれども、単にそれだけをやっているわけではありません。周りのエリアマネジメント会社と一緒になって、そしていろいろな地域の課題に取り組む仕組みをつくり、彼らはエリアマネジメントをホールディングカンパニー化していっていると言っています。その組織も変化していく、そのようにどんどん変化していくエリアマネジメントを、私たちはこれからつくっていかなければいけないのではないかと思います。時間になりましたので、私からはここで終わります。皆さんのお手元には、全国エリアマネジメントネットワークの資料も付けていいと言っていただきましたので、その概要と申し込み要領を付けておりますので、関心を持ちましたら、仲間となって、これからのエリアマネジメントを一緒に切り開ければと思います。ありがとうございます。

●登壇者プレゼンテーション【コメンテーター/国土交通省都市局まちづくり推進課長　佐藤守孝】

国土交通省の佐藤です。私からは、このような写真をご紹介します。日常の中で、好きな公共的空間はどこですかと聞かれて、実は二晩ほど悩みました。25年間、役人をやっていまして、国民全体の奉仕者ということで、毎日公共の中にいます。空間も基本的に公共で、仕事も公共です。ですから、日常の中の公共的というものが、私にとってはどちらかというと民間的な感じということを考えました。また、好きか嫌いかという思考を、なかなか仕事では考えません。好きか嫌いかで仕事をしていると、仕事が進みませんので、どちらかというと必要か、必要ではないかということになってしまいます。非常に悩みました。

結果的には、この青空の下の解体工事現場です。これが何かということなのですが、毎日会社に行く通勤経路の中に、地下鉄駅のすぐ近くに、一つだけ立ち寄りをする場所がありました。何の変哲もないチェーン店のカフェです。振り返ってみると、ちょうど1年前に、ここが店じまいをして解体されました。53年間、地元とともに愛され続けたチェーン店だったのですが、何か困ったことがあれば無意識に立ち寄って、そこでしばらくコーヒーを飲みながら、新聞を読み、ものを考えていくと、仕事のアイデアが浮かぶ場所でし

た。意識はしていなかったのですが、自分にとって不可欠だった空間だということで、好きになっていた公共的民間空間です。これがなくなってからいろいろなアイデアが出てこなくなり、仕事上もいろいろと悩むことが多くなったように思います。

今日、ぜひ皆さんにご紹介をしたいことはが２つあります。

一つ目が、今日のテーマである公共空間と民間空間をどううまく使うかという事例です。左上は、札幌大通まちづくり株式会社の服部さんには大変お世話になっていますが、都市再生推進法人の第 1 号として指定を受けて、国道の上に占用区域がおかれて、いろいろな形で、にぎわいを創出されているということです。右上は、河川の空間の占用を、大阪の北浜というところでやっている事例です。これも任意団体としては全国で初めて河川敷の包括的占用者としての許可を受けて、1 年間を通じたイベントを行っています。

それから左下は、馬場さんが言っておられた南池袋公園です。非常に有名な取組です。右下は、民間の広場を原っぱにして、コンテナを置いて、地元の子どもたちが親と一緒にいろいろなアクティビティができる空間にしていこうという佐賀県佐賀市発の取り組みです。

今日、ポスターセッションをやっていた中で、国土交通省のブースで、これらの全国の先駆的な取組を紹介するパンフレットを置いていました。もうなくなってしまったかもしれませんが、お持ちの方は、ここに載っていますのでぜひご覧ください。

二つ目です。こういった取り組みを行うときに、市町村が信頼する民間のまちづくり団体を指定して、地域の民間の企業と連携をして、いろいろな活動をしていただけるという仕組みがあります。これが、今日の会議のテーマの一つである、都市再生推進法人です。平成 19 年に仕組みができて、徐々に広がってきましたけれども、平成 30 年に全国 50 団体まで広がってきました。地方都市にもかなり広がってきています。ここ 2 年で 2 倍に広がって、これからは地方都市でも、いろいろなまちづくりの推進団体、主体としての活動をいただきながら、一緒に進めていきたいと思っています。今日は札幌、福井に出演をいただいています。詳細な説明はお手元の資料にありますので、ご興味があれば後ほどご参照ください。以上、私からのご報告です。

●リアルタイムアンケート

田坂　コメンテーターというお名前で壇上に上がってくださっています。パネルディスカッションであればパネリストとお呼びするところなのですが、これからサテライト会場の皆さんのお話などを聞きながら、恐らくこの 4 人は規定演技を終えたところで、これからアドリブでたくさん話そうというところかもしれません。キャッチボールをしながら前に進んでいきたいと思います。

サテライト会場の皆さんのプレゼンテーションをもらう前に、橋口さん、アンケートの紹介をお願いします。

司会（橋口）　分かりました。では、ここで皆さんに事前にご案内をしているリアルタイムアンケートをやってみたいと思います。事前アンケートにも 320 名を超える方にご参加いただきましたが、携帯電話、スマートフォンをお持ちの皆さまは、スマートフォンをご用意ください。

皆さんには、次の二つの質問にご回答いただきます。手順は、先ほど読み取っていただいた QR コードと同じです。QR コードをカメラで読み取っていただいて、二つの質問にお答えください。スクリーンにも出ていますが、まず一つ目は、コメンテーターの皆さまにもお答えいただいたものと同じで、皆さまが日常の中に好きな公共的空間があるかどうかを、「ある」「なし」でお答え

ください。「ある」というふうにお答えいただいた方は、その場所が公有地なのか民有地なのか、また、選択肢の中には公有地か民有地か分からないという選択肢もあります。その三つの中からお答えいただきまして、まず、そもそも公共的空間が皆さまの日常の中にあるかどうかという現状の認識を、ここで共有させていただきたいと思います。

操作方法などで分からない方がいらっしゃいましたら、手を挙げてください。または、会場のスタッフにもお声掛けください。操作方法はスクリーンにも映していますが、QR コードを読み取っていただければ、そこから URL でアクセスいただいて、簡単にアンケートに答えることができる仕組みです。回答後は忘れずに送信というボタンを押してください。事前アンケートに一度お答えいただいた方は、同じようにやっていただきますようお願いします。

今、会場を見渡すと、東京会場はもうお答えいただけたようですが、サテライト会場はどうでしょうか。大丈夫そうでしたら、手を振って教えてください。大丈夫でそうですね。ありがとうございます。では、アンケートはここで締め切ります。ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。

今、集計作業に入っているのですが、速報で 300 名を超える方にリアルタイムアンケートにお答えいただいたという情報が入っています。大方、今日の会場の皆さまの大きな傾向が、この結果で分かるのではないでしょうか。

集計を楽しみしているのですが、その間に、東京会場の登壇者の皆さんが座っている椅子をご紹介します。ご存じの方も多いかと思いますが、これは海外のアウトドア家具メーカーのものです。世界中で住宅や公共施設など、公共空間を含めていろいろなところに置かれていまして、公共空間で有名なところですと、パリのチュイルリー公園や、ニューヨークのタイムズスクエアや先ほど保井先生からもご紹介いただきましたブライアントパークにも置かれていて、街のアイコン的な存在として認知されているチェアになります。

それから、先ほど馬場さんから、好きな公共的空間として南池袋公園をご紹介いただきましたが、南池袋公園のイベントでもこの椅子を使っているということですが、馬場さん、座り心地はどうですか。

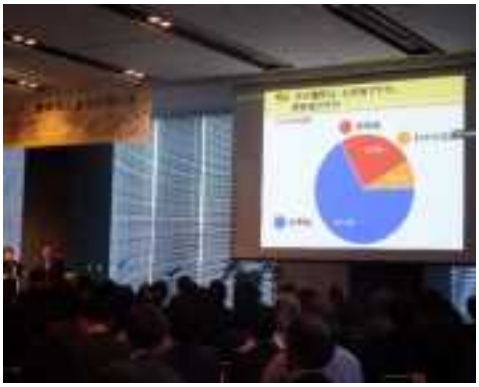
馬場　すごくいいというわけではありませんが、屋外ですので、ちょうど良いぐらいです。軽いし丈夫、雨に強い、運びやすい、それが愛される理由かと思います。雑に扱っても耐えてくれる感じが、外では良いです。

司会（橋口）　ありがとうございました。と言っている間に結果が出揃ったようですので、田坂先生にお戻しします。よろしくお願いします。

田坂　それでは結果を見てみましょう。画面の表示をお願いします。

あなたが日常の中に好きな公共的空間が「ない」人が 12%になっています。これは、もしかすると良いマーケットになってくるかもしれません。「ある」という人が 87.9%です。

次の設問につないでみましょう。それは「公有地」ですか、「民有地」ですかという設問では「民有地」が 24%あります。あるいは「分からない」というところがありますが、そこがミソかもしれません。もっと分からなくしていこうということが、もしかすると公共的空間という考え方かもしれませんし、これからは民有地公有地という、設問そのものが、なぜ改めて聞いているのですか、となっていく世の中を我々はつくろうとしているのかもしれません。ありがとうございます。



では再び、公共的空間というテーマに戻って、サテライトの皆さんのプレゼンテーションを、聞いてみたいと思います。札幌会場、福井会場、宇部会場の順にお願いします。

●サテライト会場プレゼンテーション【札幌会場】

服部　それでは札幌からお話をします。札幌では、まず都心の全体図についてお話をしたいと思います。

図中にあります、ひし形になっているところが、都心部として設定されています。平成 14 年、2002 年のときに、都心まちづくり計画、中心市街地活性化基本計画が TMO 構想に移りまして、この中で札幌 TMO が立ち上がって活動をしていました。それぞれの地域は、それぞれの地域の特性に応じた形でのマネジメントをするチームをしていました。2006 年以降に関しては、地区ごとに活動していこうということで、3 つのまちづくり会社が活動しています。札幌大通まちづくり株式会社は 2009 年から、札幌駅前通まちづくり株式会社は 2010 年から、一般社団法人さっぽろ下町づくり社は 2018 年からとなっています。公共的空間の活動等を通じて、都心まちづくりを展開していくためにも、行政との連携は必須だったというふうに思っています。これが都心全体のお話です。

次に、札幌大通まちづくり株式会社について、引き続き服部からお話します。組織の概要については、資料に書いてありますのでご覧ください。札幌大通まちづくり株式会社で行っている公共的空間を活用した取り組みに関しては、歩行者天国の運営管理、木製ベンチの設置、あとは駐輪器具、いわゆるポロクルというサイクルポートの設置です。それ以外には、エリアマネジメント広告、イベント通達を使ったイベント、道路占用特例、都市利便増進協定、道路協力団体を実施しています。この道路占用を行う取り組みに関し

ては、札幌市及び北海道開発局の皆さんと連携をし、支援をいただきながら運用をしているところです。それ以外にも、自転車対策や、荷さばき対策、貸し切りバスの対策等を含めた、都心交通に関わる取り組みを行っています。

次の写真は、すわろうテラスに関してです。これは皆さんに結構見ていただいていると思いますので、簡単に説明をします。路面電車のループ化事業に合わせて、直轄国道である国道 36 号線、駅前通の観光地をコースとする交差点に、新しい施設という形で、建築物ではなく、基礎の上にコンテナ型の店舗を置き、食事購買施設と木製テラスを実施しています。ありがとうございます。

では次に、札幌駅前通まちづくり株式会社の取り組みについて、内川さん、お願いします。

内川　札幌駅前通まちづくり株式会社の内川です。会社の概要は資料のとおりになっていて、私たちは道路空間である札幌駅前通地下歩行空間（チ・カ・ホ）と札幌市北３条広場（アカプラ）、そして民有地の中にあるテラス計画とコバルドオリという施設の運営をしています。その他にも、札幌大通まちづくり株式会社さんと同じようにエリアマネジメント広告を実施し、それを背景に、さまざまなイベントを実施しています。

ここではアカプラとコバルドオリについてご紹介します。左のように、アカプラはもともと車道であった場所を、隣接するビルの建て替えに伴い、公共貢献の一環として整備された施設です。現在は右のように広場として活用されておりまして、年間 30 イベント程度実施しています。アカプラは札幌の都心部の中でも四季をより感じられる空間ですので、イベントの際もそれを意識して計画をしています。

下のほうが 2017 年 12 月にオープンした、期間限定の施設であるコバルドオリです。こちらは、地元の事業者さんによる店舗や、都心部に出店したいと思っている方々に向けたチャレンジショップ、そしてさまざまなことを起こそうということで、コバル計画というコミュニティースペースも運営しています。左の写真は、コバルドオリ全体を使ったコバルフェスティバルです。飲食店の皆さんには独自のメニューを作っていただきました。このしつらえは、常駐している運営スタッフが 2 人いますので、その 2 人によるオリジナルのデザインです。右に関しては、社員が企画した、北海道に縁もゆかりも

ない人ナイトというものです。北海道に転勤してくる方が多いので、こういった方々に向けたエリアならではの企画も運営しています。私からは以上です。

近藤　最後に、一般社団法人さっぽろ下町づくり社から紹介させていただきます。組織概要は資料に書いてあるとおりです。一番後発ですが、大通、駅前通と創成川を挟んだ川向こうのエリアで活動をしています。かつて、ものづくりの拠点のまちだったのですが、今や工業機能の大半が郊外移転となりまして、その後のマンション立地の進展から営みが見える暮らしの街になっています。そういった場でまちづくりのお手伝いをしています。都心にありながら暮らしの場がありますので、住んでいる方、なりわいを持っている方々に、この街の持っている価値を知ってもらう、共感していただいて、都心に居場所をつくっていただきたい、そのようなことをお手伝いするための活動を始めました。

まだ活動を始めて日も浅いですから、たいした実績はないのですが、街のコミュニティの拠点である神社を使って、地域の方々のつながりの場づくりということで、マルシェイベントを行い、街中に埋もれている物件を掘り出して、リノベーションをしていこうというところで、下町リノベ塾ということをやりました。

それから、人の居場所をつくる前に自分たちの居場所をつくろうということで、さっぽろ下町サロンという場をつくって、八百屋をやったり小さなミーティングをやったりしています。そもそも、地域に根ざした組織になりたいということがありまして、古くからの地域の祭事のお手伝いもし、もう少し価値を高めていこうというところで企画提案をして活性化を図るようなことも進めています。簡単ですが、私からは以上です。

服部　３つのまちづくり会社の活動についてお話させていただきました。どうもありがとうございます。

田坂　コンパクトにまとめてくださって、ありがとうございます。一応、シナリオ上は続けて 3 会場を連続で行うということになっていますので、コメンテーターの方はしばらくお待ちください。福井会場、プレゼンテーションお願いします。

●サテライト会場プレゼンテーション【福井会場】

岩崎　福井市の中心市街地は、JR 福井駅を中心にして公共交通機関が集中しているエリアです。周りに業務エリア、商業エリア、住宅エリアという感じで、比較的近接しています。このエリアの中で、福井駅の向こう側にアオッサという再開発施設があるのですが、そこからハピリンがあります。このハピリンも再開発ビルですが、アオッサとハピリンから西武福井店に続く通りをにぎわいの主要動線と位置づけまして、街のにぎわいづくりに取り組んでいるところです。これから、約 4 年後の 2020 年 3 月には、北陸新幹線の福井駅が開業するのですが、その開業を見込んで、今、福井駅の周辺では再開発の動きが 3 件、5 ブロックで発生しています。この赤枠で囲ったところです。ですので、住まいのにぎわいづくりが今の課題です。

また、こういった中心市街地の再開発を全体でまちづくりとして捉えて、機能が重複することによる供給過多であり、駐車場の運用など、関係者全体で将来像を共有しながら情報交換を行っているところです。

そして、こういった取り組みにおいて、官と民の間で活動している、まちづくり福井株式会社ですけれども、平成 12 年 2 月に福井市の第 3 セクターとして設立されました。当初はアーケードや響のホールなどのハード整備に取り組んできましたが、その後はイベントなどのソフト事業を中心に事業を行っています。平成 19 年の中心市街地活性化基本計画の認定後は、こういったものに取り組んできたところです。そして平成 25 年 4 月には、都市再生推進法人の指定を受け、平成 28 年には、先ほどの再開発ビルのハピリンに、福井市が所有する屋根付き広場と多目的ホールがあるのですが、その二つを指定管理で受けています。そして平成 30 年には、都市利便増進協定を結んでいるという状況です。道路や広場、都市公園、そういった公共的空間を、民間が利用する取り組みだけではなく、民間の物件を民間がリノベーションして再活用するという空間利用、これも福井ではたくさん起こっています。特にリノベーションまちづくりは、4 年前から福井市の協力を得ながら取り組んでいまして、現在では中心市街地で 10 軒以上のリノベーション物件が動いているという感じです。今日は、そのようなリノベーションに取り組んでいるメンバーにも一緒に来ていただいています。

それから、今年のリノベーションの講座では、今日東京の会場にいる馬場さんに、スクールマスターになっていただいて、地元のリノベーション経験者にもアドバイスする側として関わってもらうなど、できるだけ地元でリノベーションまちづくりの動きを確立していこうということで取り組んでみました。

こういった公共的空間の利用について民間利用やリノベーションだけではなく、新栄テラスというところでは、官と民が土地の利用権を交換して、交換した空間を民間に委託するという取り組みを福井市が行っています。もともとコインパーキングだったところを、利用権を交換して、福井市が権利を得た場所で民間がマルシェやビアガーデンなど、居心地のいい空間として、自由に使っているところです。

こういった取り組みを、もう少しまちづくりの観点から説明すると、再開発ビル、ハピリンや西武福井店、ここに集まった人たちを、にぎわいの主要動線

に沿って動いてもらえるように道路占用許可の特例をつかって行い、その回遊を商店街全体に広げようということで、都市利便増進協定を使って、道路や都市公園、こういったところでまちづくり福井株式会社や、民間のグループがさまざまなイベントを行っています。福井市は、こういった取り組みを規制緩和だったり、いろいろな柔軟な解釈をして運用をしてくれたり、市民が実施するイベントに補助などもしてくれています。このような取り組みをすることで、市民が街を自分がやりたいこと、やってみたいことができる場所という形で認識することと、リノベーションなどで新しく生活をする場や、働く場所として活用してもらえるようになります。そして、まちづくり会社はその中間で、それぞれの企画や民間側のサポート、それから官と民、民と民、こういった間に立って、いろいろな調整を行っているというところです。

それから、街への効果という面では、これまで行政が管理していた公共的空間を使いやすくすることで、市民は自分たちが使える場所として、改めて認識してもらえるようになり、まちづくり会社としては、道路でバーベキューや運動会など、今までより少し思い切った使い方に挑戦してみるということができています。駅前というと、以前は買い物をする場所としか見てもらえませんでしたが、これからは自分たちが楽しむ場所として、魅力を感じてもらえるようになっていけたらいいと思っています。こういった取り組みを行うことで、来街者が増えて、消費が増えて、新しい店舗が起きる、新しい投資が起きる、このような良い循環をつくることが、街にとって必要な部分なのではないかと思っています。

そして、最初にお話ししたように、あと 4 年ほどで福井にも新幹線が開通するということで、そのタイミングを見据えながら、再開発事業を始め、さまざまな投資が起きています。ただ古いビルが新しくなる再開発事業だけではなく、その周りにはリノベーションまちづくりを中心にして、きちんと人のコミュニティがあって、その街を楽しんでいる人や、街で働く人、生活している人など、こういった地元の人や、駅前に遊びや仕事で来る人、そして新幹線で県外から来る人、それぞれの人が魅力的に感じてもらえるように、中心市街地をそういったまちづくりにしてきたいと思っています。以上です。

田坂　本日のミーティングではいろいろなことにチャレンジをしています。多少、お聞き苦しいところがあったところはお詫びをいたします。順次、回線が整うことを祈念します。三つ目の会場である宇部会場、よろしくお願いします

●サテライト会場プレゼンテーション【山口宇部会場】

宋　宇部市の若者クリエイティブコンテナ YCCU につきまして発表します。ご存じのように、宇部市は広島から約 160km 離れており、人口は 16 万 5000 人程度です。他の中小規模の地方都市と同じく人口減少が進んでいます。宇部市は現在、立地適正化計画の策定を進めており、コンテナが位置しているまちなかエリアは、都市機能誘導区域として多様な都市機能を集約していく重要な立地的な特性を持っています。先ほどのまちなかエリアは、宇部市中心市街地とほぼ同じ規模ですが、その左側の点線で囲んだところが中央町です。左の写真は戦災直後の航空写真なのですが、あまり被害を受けず、今でも狭い道路などが残っているエリアです。航空から見た中央町なのですが、左側は宇部興産が位置しており、その工業地帯の後背地として形成されている街

です。黄色が飲み屋街であり、昔からの商店街が通っており、その真ん中に多世代交流スペースが整備されています。ご覧のとおり、空き地が約 25%で、空き店舗が約 33%と、街の約半分ぐらいがあまり使われていないという状況です。日本一のシャッター街とも呼ばれているエリアです。そのど真ん中に、アーケードの一部を撤去し、2 つのコンテナと芝生広場が整備され、2016 年 9 月にオープンしました。

YCCU の中の様子ですが、若者の目線からまちなかを考える場として、2017 年 4 月にオープンし、現在学生 6 名と大学教員 2 人、スタッフ 2 人で運営をしています。

官民連携の体制ですが、宇部市が全体の整備を行い、イベント企画やコンテナの管理運営は YCCU と隣の POLE POLE CAFÉ が行っています。コンテナの敷地は、市のものですが、活用している芝生広場は民地で、宇部市がオーナーさんから借地として借りています。カフェのテナント料は、まちづくり会社にぎわい宇部経由で、宇部市に入るという形になっています。

にぎわい宇部は、多世代交流スペースをオープンする前に設立しており、空き家、空き店舗などのサブリースなど、街の家守的な機能を担っています。

まちなか再生の基本的なコンセプトは、こういった芝生広場を整備し、暫定的な利用を進めていくことで、地域全体のポテンシャルを向上させ、それにより新たな、民の土地利用を誘導するということを目的としています。

これから YCCU の主な活動内容をご紹介します。まず、YCCU の設立経緯とも関係するのですが、宇部市では 2015 年から毎年、地域住民や学生によるまちなか再生ミーティングを行っています。2 年目には、若者活動拠点施設に関する提言書を策定し、それに基づき YCCU が設立されています。また、宇部市のポケットパーク整備計画に合わせて、YCCU で学生による提案を行いました。コンテナは多様な主体が連携する場として機能しています。2 回ほどの住民説明会を行い、実際にポケットパークの整備に協力しています。

2 つ目は集客イベントの開催です。整備された多世代交流スペースと芝生広場の地域住民における認知度が低いという問題があり、それに合わせて、まず地域住民に知ってもらおうというイベントを企画して、2 年間やり続けています。また、YCCU の学生提案にも関係するのですが、イベントなどに合わせて、子どものための模型作りのイベントを実施し、皆が模型を通じて話し合う機会を設けて、街の記憶や愛着を共有しています。これはイベントの様子なのですが、真ん中の DJ は行政の方で、やぐら的なものは商店街が作っています。照明も地元の方に設置していただいています。本当に少ない予算で、皆ができることを話し合いながら、できるものを考えてやり続けています。

それから、子どものイベントにも積極的に連携をしています。子どもが作った模型を使って、皆で地域の課題について、親も含めて話し合いすることも実施しました。

最後に、社会実験についてです。我々はこれを出張芝生と言っていますが、こういった芝生広場の心地よさを地域住民と共有し、宇部のど真ん中に走っている、平和通りの幅広い道路空間の一部を、公園のように活用するという

社会実験を、宇部市の歩行者天国に合わせて実施し、空き地に芝生を広げて芝を拡張した実験をしています。

最後になりますが、こういったいろいろな取り組みを2年間続けています。

また、まちづくり会社にぎわい宇部の事業ではありますが、リノベーションによる出店が、2、3年間で8店舗増えてきています。少しずつ、良い成果を出しているところで、これからもこのような取り組みが、いかに民間の土地に良い影響を与えていくかを課題として考えていきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

●Buzz Session1

田坂　ありがとうございます。各会場の皆さんには、7分という時間を申し上げてしまった関係上、本当に駆け足で内容の濃いプレゼンテーションを組み立ててくださっています。さて、ここで急に事務方の皆さんには申し訳ないのですが、シナリオにないことをやってみたいと思います。ここに来ている 400名、それからサテライト会場も含めて 500 名の皆さんは、この方達こそがエリアマネジメント、まちづくりの担い手の人たちである可能性、あるいは、これから担い手になってくださる可能性のある方々です。

今のプレゼンテーションを聞いて、実はうちも、というものが、もしかしたら連想ゲームとして働いているとすれば、それを発言していただきたいと思います。会場の皆さんが相互に、少しだけ、ここまでのこの1時間と20分の過ごし様について、少し言葉を発することのできる会場をつくってみたいと思います。少し休憩時間のような時間を過ごすつもりで、会話をしてみませんか。これは、人というものは、他者に何かを語ろうとするときにコンテンツを固めていくそうです。聞いた話は忘れるそうです。覚えた話は、大事なところで思い出せないそうです。ただし、学習効果をとてつもなく高める方法があるということを、デールという人が学習円錐と言っています。それは、経験したことを自分の言葉に代えて他者に語った経験を持つということが、その人への理解の定着になっていくということです。ですので、もし、このまま皆さんが自分の街に帰ると、何となく良い話は聞いた、資料も手元にある、何の話だっけ、とならないために、少し化学反応を会場ごと起こすという仕掛けをできたらと思います。お隣の人はお仲間として来た人でも結構です。あるいは、知らない人だったときには、どうか田坂の顔を立てると思って、少し会話をしてください。ここまでの 1 時間 20 分で知り得たお話の中で、こういうものが頭の片隅にある、あるいは、それに触発されて、このようなことが今連想ゲームで働いているということを、ほんの 5 分で結構ですので、会話をしていただきたいと思っています。必ずや、そのことから未来がつくられていくというふうに思います。単純な感想の交換で結構です。ほんの 3 分から 5 分くらいの時間、その間にまたコメンテーターの皆さんも、恐らく論点を整理して、5 分後にはもう一度壇上が引き取って、壇上の皆さんで、しみじみとサテライト会場のコンテンツを読み解くというコーナーを送って 16 時 10 分までの時間を過ごしたいと思います。休憩時間 16 時 10 分までが多少長いなというところかもしませんが、生理的現象に耐えきれない方は、このバズセッションの間も休憩時間として活用してください。とにかく、少し会話をしてみましょう。言葉を発してみましょうという、3 分から 5 分の時間を使わせてください。では、お隣の人は答えてあげてください。よろ

しくお願いします。バズセッションのコーナーを持ちたいと思います。お願いします。

(Buzz Session1)

●トークセッション　～官・民の関係性、それぞれの役割と立ち位置について～

田坂　皆さん、ありがとうございます。もしかすると、これは5分ではなく、このまま懇親会にいったほうが良いのかもしれません。口がだんだんと滑らかになってきて、こういうことを他者に伝えたいというものが、徐々に強いコンテンツの力を持つとき、必ずそれは、皆さんがそうやって今日のお隣の人に話したかのごとく、そのコンテンツは皆さんの地元の持ち場に帰って、そのまま人を動かしていくものになっていくと思います。壇上でも、実は鋭い指摘が行われています。今日は、それも含めて、本当の官民ボーダーレスに迫っていこうという趣旨ですので、コメンテーターの皆さんの中で何が起きているかということを紹介していただこうと思います。

このバズセッションのコーナーは、本来であれば後半に用意していました。後半でのバズセッションは、この会場の皆さんがどのようなおしゃべりを行ったか、壇上の方々にヒアリングしていただいて、それから後半のシナリオなきところに踏み込んでいくというために、もう一度後半にも、5時を超えた辺りでバズセッションをお願いしたいと思いますので、どうかご協力をお願いします。この時間帯におけるバズセッションは、この会場の皆さんの熱をいただいて、そのまま4人のコメンテーターの方々のコメントと、それから三つのサテライト会場のプレゼンテーションを受けて、ここから、どのように公共的空間、官民ボーダーレスというものを現状から理解していこうかという試みから行いたいと思います。

どうでしょうか。何か琴線に触れるところがあった、あるいは、こういうことのコメントを発して何かしらのテーマをつくっていきたいというものがある方はいますか。それではこれは馬場さんから聞いていきます。あるいは、この会場のこの人に聞いてみたいということも大歓迎します。馬場さん、よろしくお願いします。

馬場　あえて、少し挑発モードでいきます。今日は佐藤さんと僕がここに立っているということは、国土交通省もそれなりの覚悟だろうと思います。要するに、本当にパブリックな空間を民が担える構造を日本がつくれるかどうかということを、今問われています。そのためには、僕らはリスクを背負って、家賃を

払って、稼がなければなりません。僕らが行政制度に、そして市民に理解してもらいたいと本当に思うことは、パブリックマインドを持って事業に取り組もうと思っていますので、それが可能なフィールドを用意してほしいということです。組織的に、制度的に、それからコンセンサス、民意的にということだと思います。

例えば、僕が説明をした山形の小さな本屋さんは、もう街の庭のようになっているのですが、学生たちがクラウドファウンディングでお金を集めて、完全に民のお金でやっています。それが、パブリックに還元されていることに、美しい物語が生まれています。沼津の INN THE PARK という公園も、行政から民が借地して、投資も民でなんとか行って、本当に儲けがないということを考えながら、必死に経営をしている努力の末にあの場所ができています。だからこそ、あの場所は、お客さんがたくさん来て話題にもなっているのだと思います。要するに、僕は今、公共空間をどのように民が担うことが可能なのかの挑戦をし続けているような感覚になっています。

沼津の頼もしいところは、行政側がオーナー的プロジェクトチームをつくって、この経営、この事業、このアクティビティをどうすれば実現できるかということを、制度にしろ、組織にしろ、一緒に考えてくれました。普通は逆に、そのようなことをやるとき、敵対します。民は勝手なことを言うけど、都市公園法があるからできるわけがないと言われることが 8 割です。ですが、沼津は違いましたのでできました。住民への施設説明責任は圧倒的に行政にありますから、行政は責任を一緒にとろうとしてくれたわけです。

であれば、僕らも必死で考えるというふうになるのです。同じ船に乗れるかどうかだと思っていて、今までのまちづくり会社は、どうしても官主導で、第三セクターで、株主も 50%以上が官であったりして、企画報告がいろいろあって、いじめられたりするという目にも遭っていますが、そのような日本の状況からどう脱するかということが、公民連携の、次の時代のポイントだと思っています。紹介していただいたエリアマネジメントの事例が、どの程度経営モードに乗っているのかというところは問うてみたいですし、特に地方都市の場合で、いきなり全てフル経営というものは難しかったとしても、その中で民間経営にシフトしていこうというシナリオを描いているのかというところに、議論をしなければいけないことの本質があると思います。佐藤さん、どうですか。

佐藤裕久　まさしく、例えば宇部会場で、運営財源は宇部市の助成金となっていますが、もしも助成金が止まっても、この事業は継続力がありますか。

田坂　4 人のコメントに疑問符が付くようなものは、いったん四つ並べて、順次聞くものを決めるようにしましょう。疑問符の場合は、疑問の丈をお願いします。

佐藤裕久　実は聞こうとしたことは、何も民間が、いわゆるビジネスとして成立させるということだけが良いとは思っていません。これは公共性が強いだろうということに、何らかの公的なお金が使われて、アシストしていくということは

非常に大事だと思います。

ただ、例えばうちは京都府立植物園でカフェをやっているのですが、もともとは当時の山田知事が公募を掛けました。その掛けられた要因も、植物園は非常に良いイメージがあると思うのですが、皆さん、気付いてください。夜になると、ものすごく治安が悪い場所なのです。誰もおらず、ずっと壁が続くのです。そうすると、普通であれば変質者がいれば、お店に入り、民家に助けを請うことができますが、ずっとブロックの壁なのです。助けようがありません。ですから、そのために治安維持も含めて、こういうところににぎわい施設を造りたいという思いで、府は募集を掛けました。ですが、1 人も 1 社も応募がありませんでした。大阪の中之島などは本当にブルーシートがたくさんあって、女性と子どもは近づかない場所でした。僕たちはそこで店をやっていて、しかも今は年間 18 万人も来てくれています。そのような場所でなぜできたのかということが、府の局長からの質問で非常に微妙ですが、実はそこからのプロセスでした。

今は現存しないから、誰もないものを信用しません。あるものは理解しますから、ないものを突破するためには、僕は二つの力がいると思っています。一つは、僕たちのようにチャレンジングしている民間企業、もう一つは何らかのアシストをして、共通の思いの中でやっていく行政機関、この二つの機能がうまく回っていくと、実は今、見過ごされている公的空間、公的スペースが、大変な宝の山になっていくと思います。

ですから、宇部でやられていることが、例えば助成金で成立していて、本当に民間企業を招くような一つの誘い水になるということであれば大賛成ですし、むしろ、素晴らしいことだと思います。僕らのようにチャレンジングしていく会社だけでやっていくということはリスクです。1 軒のカフェを作ろうと思うと、億かかります。ですが、それぐらいのお金をかける覚悟の、民間のエネルギーが、街を変えるというためには必要です。500 万円程度でカフェを作っても人は来ません。本気で投資をしてやるという覚悟を持ってやっています。実は今、国土交通省が公共用地に民間を誘致する覚悟を、特に 5 年ぐらい打ち出してこられているということは、決して国土交通省などの行政におべんちゃらを言っているわけではありませんし、僕は敵に回しても何も困ることがないので言いますが、最近の風潮は非常に良いです。これは、明らかに役所が変わってきたことだと思います。これは点数稼ぎです。保井さんに、バトンタッチします。

保井　どういう立場からいきましょうか。三つのサテライト会場の皆さんは、全員、全国エリアマネジメントネットワークに入っていただいています。このような立場もあります。それだけではなく、実は国土交通省が変わってきたというようなお話がありましたが、私も公有地に民間の活力、エネルギーを注入して変えていこうという取り組み、特に例えば Park-PFI や、広場化して

いくなど、そういうことに本当に今、5、6カ所は関わって、ビジョンをつくったり、事業者選定に関わったり、その後の伴走をしていたりというようなことがあります。本当に変わってきているというふうに思います。

そのときに、私がそういうことになぜ関わっているかと言いますと、恐らく、官民ボーダーレスという今日のテーマですが、とはいえ、敷地の所有や管理は決まっています。そうなったときに、公有地は所有者なり管理者がそこを考えています。例えば、Park-PFIになり、民間の事業者が入ったとしても、どうしても公園の中の話、あるいは事業区域の中の話で完結してしまいます。その後、例えば隣の道をどう変えていくべきか、どのような流れをつくっていくべきか、場面として、どういうホスピタリティを描いて、エリアとしての稼ぐ力を上げていくか、というようなことを考える仕組みを、どう考えていくのか。あるいは、まさに民が取り組むような土壌をどうつくっていくかというところです。そこが、このように変わりゆく時期だからこそ、そのようなものも一緒につくっていかなければいけないと思います。

これが、確かに今日の事例でもありましたが、行政のお金で始まっているということはあると思います。例えば、南池袋公園のnestの話も、区がやろうという意味を持って、nestに少しお金を出してやっているという現状がありますが、恐らく馬場さんも、それが自立していくように収益力を高めて、民が主導して、そのエリアの価値を高めていくというストーリーを持っていると思いますので、恐らく宇部もそのようなストーリーがあるのではないかと思います。ぜひ、そこの官がエリアの価値を上げていくような仕組みをつくっていきつつ、それが民の中で、あるいは官と民の連携の中で、どのように自立して、例えば助成金、補助金が終わっても続くモデルを描いているのかというところは、全体で悩んでいるところではありますが、地域の中でも考えがあると思いますし、取り組みがあると思いますので、その辺も突っ込んで情報をシェアしてもらうと、また次の議論につながるのではないでしょうか。

佐藤守孝　今、札幌、福井、山口のお話をいただきました。福井ではリノベーションの物件が10軒以上、山口でも8軒程度出てきていると聞きました。北九州で始まったリノベーションまちづくりは、小さいところから始めて、投資回収期間を短期間にして、そして街にハードではなくてソフト、需要から入っていく、その需要をどう見つけようかということから始まって、それが今、全国50地域以上に広がっているという状況だと承知しています。

先ほど、佐藤社長からご指摘いただいたのは、本当に官にやる気があるのかということだと思います。小さいところからのスタートも徐々に出てきていて、つながっていく支援を国でも、この2、3年力を入れてやっています。国土交通省都市局まちづくり推進課では、信用金庫、中央金庫などとパートナー協定を結んで、これまではメガバンクしかお客さんとして付き合っていませんでしたが、一番街の身近なところから、いろいろ投資回収のために、事業性をいかに高めていくかというお手伝いをしています。

それからもう一つご紹介しますと、先ほど言い忘れましたが、保井先生も言っていたPark-PFIで公園の中に民間がカフェを作って、その事業収入で公園整備も担ってもらう仕組みです。この仕組みはどんどん広がろうとしています。このモデルになったのが、南池袋公園の取り組みです。もう一つは、昨年の国会で成立しました、都市のスポンジ化対策としての都市再生特別措置法の改正です。この法律では、利用権として、暫定でも良いから土地を利用しようという仕組みを創設しました。これは市町村が主導して計画をつくり、関係者に働きかけて合意を得たら一気に一括で利用権が設定されるという計画

です。そのモデルが、先ほど福井から紹介された新栄テラスです。私どもの動きも、民間のいろいろな方々の情報をいただいて、教えていただければ、そこの情報をさらに取りに行って、解決できなことも多いのですが、いろいろな悩みや苦労も、一緒に悩んでいくということをやろうとしています。先ほど馬場さんからご紹介のあった沼津市でも、市の中に横断的な組織をつくり、ワンストップ窓口で民に寄り添う取組をしています。

以上でご紹介はやめますが、国がそのように動き出していることは、補助金をあげるというようなことではないのですが、自治体の皆さま方、民間の皆さんとの、協働の中で全国から聞こえてくるいろいろな動きを、少しでもいいねと思えたら、皆でやっていくということはしています。

佐藤裕久　一瞬だけ差し込ませてください。今、佐藤さんがおっしゃったことで、そうだなと思ったことがあります。大きな投資が必要だという言い方をしましたが、大きな投資だけが良いわけではありません。僕は最終的に街を本当に盛り上げていくのは、その街に生まれ、生き、もしくはやってきて、そこで営みをされている方が、その街を愛して、その街の中でしか起こり得ないものをやることだと思います。

今、信用金庫の取り組みも素晴らしくて、小さい投資だから駄目だということではありません。大きな投資は、当然我々のような企業体がするべきです。ただ、そのリスクを張ってやったことによって、人が来る、もしくは街の自信が取り戻せる、ということがある。うちの街は駄目だと思っていたけれども、いろいろなところから来てくださったり、雑誌に載ったり、ましてやテレビの取材が入って、何かにぎわってきた、この街もいいところがたくさんあるのではないかと思った時に、その街で今までやっていらした、いろいろな民間の方が、もう一度やろうという勇気を持てることのきっかけに、助成金や、もしくは我々のような企業体が投資していくべきだと思います。ですから、本当の意味での、街の繁栄は、個人店です。それは絶対に、行政として見失わずに、絶対にサポートしていってあげてほしいと思います。

馬場　僕も一つだけ入れたいと思います。今、民で自立することを強調しすぎましたが、次の行政のモードは、特に地方都市はそうだと思うのですが、地元最大の投資企業だというふうに思うモードはないのかと思います。結果的に行政が、イニシャルコストなどを助成金で初期投資をしないと何も動かないという状況にあることは間違いありません。これは民も公もありません。

誰かがリスクテイクをして、投資をして、ただ、投資をする側は経営を判断する場合は、必ずリターンがあって、投資利回り何%ならば事業が回るのかという考え方で、民間はやります。行政にも、その感覚を持っても良い時代がやってこようとしているのではないでしょうか。平たく言いますと、利回りは民よりもゆっくりで良いわけです。絶対に公が担わなければならない福祉などもありますので、そこの場合は差し引いても良いと僕は思います。

僕も九州で育ちましたので、田舎ですとスタートアップにいきなり民がお金を出すことは無理ですので、行政が民間の経営感覚を持ってプロジェクトに投資して、その後の税収や賃貸のお金など、長い時間をかけて回収していくというモデルをしっかり持てれば、ただ税金投入ではなく、ポジティブな投資に見える気がします。そういうモードになっていく意味においては、助成金や補助金は有効に働かせるべきだと思います。

田坂　さて、サテライトに聞いてみましょう。二つ質問をしてみたいと思います。三つのサテライトとも答えていただけるとありがたいです。

財源は補助金ですか。そうであれば、止まったらどうしますか。

それから、それに付随して、あなた方の活動はどの程度経営モードですか。

この二つをサテライトに質問していいでしょうか。的確に正確に答える必要はなく、今の雑感で結構です。あるいは、この東京の、壇上の皆さんのコメントを聞いてどう思ったかという、コメントへのコメントでも結構です。サテライトからのお言葉をいただきたいと思います。このようにむちゃぶりをしてもいい状態ですか。プレゼンテーションをしていただいた順にお尋ねします。札幌、福井、宇部という順番にお答えいただけると助かります。

服部　分かりました。まず一つ目が、財源に補助金が入っているかどうかという話でいいでしょうか。うちは三つありますので、もしかすると、それぞれ違うかもしれませんが、札幌大通まちづくり株式会社の場合は、基本的には売り上げベースをしながら、運営費のほうに補助金が入っているということはありません。ですので、止まったらどうするかということを考えますと、止まらないように新規事業をどのように開拓していくかというところが大切だと思っています。そのような意味では、地域と接点を持ちながら、どのような形で経営をしていくかということを常日ごろから考えているということが現状です。

では駅前通まちづくり株式会社の場合はどうでしょうか。

内川　駅前通まちづくり株式会社の場合は、メインの収入は公共空間の利活用に伴う広場の利用料だと思いますので、その売上げが下がった場合どうするかという考え方はあるかもしれません。基本的には札幌大通まちづくり株式会社と同じように、運営費に関して言いますと、補助金等はいただいていません。指定管理で広場を活用していく以上、その施設のポテンシャルを上げていく必要がありますので、それと売上とのバランスをうまくつくっていければいいかと思っています。

では(一社)さっぽろ下町づくり社の近藤さん、お願いします。

近藤　諸先輩がたと全然規模が違いますので、なんとも言えませんが、基本的に補助金ありきで活動するというスタンスは取っていません。事業ごとに入れている場合もあるのですが、原則としては地域の協賛なりサポーターという形で運営資金を募りつつ、事業ごとに売り上げを創っていくことで収支を合わ

せています。経営に関しては、自分たちでも拠点を持ち、運営しているということもありますので、そこを持続させるためには、事業性というものはきちんと考えなければいけないという意味合いでの計画は、持ち合わせているつもりです。

田坂　ありがとうございます。それでは福井に移ります。よろしくお願いします。

岩崎　まちづくり福井では、まず道路空間の利活用でお答えをしますと、先ほど説明した道路を使う部分については、補助金はほとんど入っていません。動き始めるときに、設備投資で少し補助をいただいていますが、運用をする中での補助はなく、逆に都市利便増進協定を結ぶ際には、民間に使ってもらう際に利用料をいただいています。その中で収入に見合う維持費を捻出しています。リノベーションと新栄テラスはそれぞれから話をしてもらいます。

宮田　新栄テラス運営委員会です。新栄テラスの形態は少し特殊ですので、詳しく言いますと長くなりますので言いませんが、基本的には補助金は入っていません。

高岡　私はプレーヤー側で、2年前に福井にUターンをして、事業を運営して民間の側になっています。先ほどの新栄テラスの周りに、今、3店舗、4店舗程度の小さな事業者の方がお店を出されたりしています。まちづくり福井のほうに相談すると、例えば不動産ラインに乗っていない空き家などの相談ができたり、いわゆる公共の市や県の方にも話が通じやすいと言いますか、我々からすると、非常にやりやすいという意味で、実質的なお金の話ではありませんが、包括的に見ると非常に効果があると感じています。

岩崎　補足しますと、再開発事業で指定管理を受けている空間（ハピリン）については、3年契約、5年契約という感じで、指定管理事業費をいただいて、その範囲の中でイベントを行っています。それ以外に、空間をお貸しする際の利用料をいただいて、それも運用の一部になっています。再開発事業としての公共的空間だけではなく、別に活用できる場所があるということです。以上です。

田坂　ありがとうございます。続いて、宇部会場、お願いします。

小林　我々は、運営としての大学、そして行政、民間の3社で協働した形で活動をしていますので、それぞれ1名ずつ代表をしてお話をします。

まず、大学の人間として私からお話をしますと、こちらの活動は、当初は宇部市からのお話で、それを契機に始めることになりました。今日は皆さんに周辺の地区の状況をお見せできませんので残念ですが、先ほど、宋先生の説明にあったとおり、周辺はもともとアーケード街なのですがシャッター街で、炭鉱の採掘のトンネルのようなひどいありさまで、まず治安が悪かったということがあります。そして、その周辺をどうにかしなければいけないということで、区画整理などいろいろなことが立ち上がったのですが、なかなかうまくいかなかったということもありまして、もともとは行政の問題意識が非常に大きかったのだろうと、我々は認識しています。

ですので、どちらかというと、先ほど馬場さんのお話にあったとおり、まちの再生において最大の投資家は行政だというふうに、私どもは思っていて、

行政の列に乗っかるという形で活動に参加しています。主にコンテナの指定管理にかかるものや、運営に関するものを助成金としていただいています。その中で、特に大学としては、ある意味、都市計画の人間が入っていますので、公共的な立場でも参加していますし、かといって、どちらかというと民といった感覚も持ち合わせて参加していますので、3 者協働の中では、行政と民間の間に立つものという形で、調整役として我々が入っていると思っています。

宇部市の冨田さんにお話を変わります。

冨田（宇部市）　官の立場からお話をします。先ほど、小林さんが言われたとおり、ここは密集市街地にあり古い建物は除却してもらいました。除却した跡は、新しい家が建たずにどんどん駐車場になっていくという事態が発生しまして、どうしても官が引っ張っていくしかないということで、民間の土地を借り受けて、このような施設を作りました。まず官が、ある程度、このような小さな都市は引っ張っていかないと街が動かないだろうということで、徐々にですが引っ張っていって、地元の方々にもリノベーションをしていただき、少しずつ街が変わってきています。また、㈱にぎわい宇部という会社についても、まだ立ち上がって 3 年目ですが、徐々に自立したまちづくりをしていくということで、若干私どもの方から補助金を出していますが、最終的には自立した形でまちづくりをしていこうという形で動いていただいています。ですから、ずっと官が全てやるということではなく、ある程度街が動き出すと、官が後ろに回って、民が前に出ていくという形で進めていこうと考えています。以上です。

富岡（POREPORE CAFE）　カフェを運営している富岡です。民間の立場で、厳しい形で言いますと、今のところは全然儲かっていないという現状です。一気に開発をして、きれいにして、人通りが多くなって、そこで飲食店なりを運営しませんかという声が掛かりますと、飲食店側もどんどんやりたいという声になると思うのですが、まだまだ人が集まらない場所を変えたいというところの段階で、そこで飲食店を運営してくれと言われても、恐らくこの街の人たちはなかなかイエスとは言わない現状です。私は変わり者ですので、なんとか変えてやろうという形で頑張っています。

この中で、少しずつ街が変わって、きれいになっていって、人通りがどんどん増えてくれば、恐らく街の飲食店の方々も、あそこで商売をやるとうまくいくし、行政が少しバックアップしてくれて、開業資金などをうまく回せるという形であれば、リスクは少なく、より開業したいという若者も増えていくのではないでしょうか。街も、それほどすぐに全てをきれいにできるわけではなく、この 2 年かけてもまだ進んでいない現状ですので、今はまだ辛抱のときだと思います。また、私個人としては、経営の部分でしっかり店を繁盛させていくことで、周りの飲食店さんに、うまくいく結果を見せていくしかありません。あまり行政に頼らなくてやっていける方法を考えてやっている現状です。以上です。

田坂　4人の反応が鋭くて、さらに、ここを続けようというところだと思いますが、実は、今こそ後半の都市経営とは何かというテーマに、かなり鋭く切り込んでいる部分だと思われます。まさに、民と官がどのように一つの都市を経営していくのだというところに到達できるのかというところで、この一つ一つのお言葉を、後半に引き受けたいと思います。

前半の最後、あと5分の中でいただきたいコメントは、民、あるいは経営からのいくつものコメントと並んで、仕組みや何か立ち位置のようなものについての疑問符も出ていました。これについては、むしろ、実は保井先生と、佐藤課長に、今までのコメントを聞いてどうでしたか、ということをお二人にいただいて、前半を終わろうと思います。一つは、本当に公共的空間を民が担える社会をつくろうとしているのですか。それは現実味がありますか、ということと、それから、そのために官はどのようにエリアの価値を高めていくつもりですか。あるいは、民が取り組む土俵をどのようにつくれば良いですか。

今は、例えば宇部のお言葉にもありましたように、変わり者が変えるというように、本当に奇特な人が出ればうまくいくのですが、奇特な人が出てくるまでは何もできないということでは、民が取り組み土壌をつくったとは言えないところがあります。この土壌づくりについてはどうでしょうか。本当に民が担える社会をつくろうとしているのか、官がエリアの価値を高める仕組みはどういうことか、もしくは、民が取り組み土壌をつくるとはどのような感じかということを、お二人の方にコメントをお願いします。

これは簡単な答えで結構ですし、直球の答えになっていなくても結構です。それについての感想でも結構です。このような疑問形、テーマ、問いかけが、この会場にあるということについて、お言葉をいただいて、前半の締めになると良いなと思っています。

保井　全く直球ではなくても良いでしょうか。これまでのコメンテーターの話と、それから、サテライト会場からのコメントをお伺いしていて、ここを整理しなければいけないと思ったものが、後半が都市経営になりますので、私がエリアマネジメントの話をするときには、よくマネージャー、プレーヤー、サポーターという3層に分けてお話をします。今日も福井でも、僕はプレーヤーの方だという方がいました。要するに、事業をしてしっかり稼いでいくという方々は、街の中に本当に大事なコンテンツをつくっていく方で、プレーヤーと定義するとします。恐らく街全体を眺めるまちづくり会社や、エリアマネジメントはマネージャーで少し違う立場なのだろうと思います。それは先ほどお話したように、エリアとしてのプロモーションですし、エリアの中にあるいろいろな、場合によっては社会問題というような、先ほどホームレスの話もしましたが、そのようなものを、どのようにイノベーティブなアプローチで解決していくのかというような形かもしれませんし、とにかくそのエリアの価値の最大化をしていくというような役回りです。これは、1者でやれるというよりは、官側と民側の両側からのコミットがないと絶対にできませ

ん。しかも、今までの民の体制では、ひょっとするとできないかもしれないというところにも、難しさがあります。まさにパブリックマインドを持っている、場合によっては変わり者の民の方々なども含めて、そのような新しい、これからのパブリックをつくっていこうとしている民と行政が一緒になってつくっていくというような仕組みなのだろうと思います。

とはいえ、それがずっと補助金でやっていくようなモデルもないわけですので、マネジメントはどうやっていけるかというモデルが必要なのではないでしょうか。それから事業に関しても、変わり者だというような話も出ましたが、その方の投資だけで完結するのではなく、その方に公共的機能も持っていただこうということが、これからの社会だとしますと、そこに、いわばギャップファイナンスのような、その機能に対して官はどれだけ投資をしていくのか。また、先ほど自立へのステップと言いましたが、再開発などは、終わればあとは地域によろしくと言って、急に自治会や商店街の世界にいくようなことが、よく地域の中にあります。そうではなくて、そこに対して、今度は3年なり5年なりの間、官が支援をしていって、民に自立していただこうというような仕組みづくりを、プレーヤーやマネ―ジャーに対して、将来にわたって街の価値を上げていくための仕組みを、どうつくっていくかというストーリーをつくっていくと、まさに本当に民が公共をきちんと分担をしながらになっていく社会になっていきますし、官の方も、そのような民に対して、どんどんマーケットを開いていくというような社会になっていくのではないかと思います。全く直球ではなくて、すみません。

佐藤守孝　国土交通省まちづくり推進課としてのコメントを申し上げますと、公共的空間を民が担うのかということを国が本気で進めていく気なのかということについては、これは本気です。毎日、そのような仕事をやっています。もちろんエリアによって、その地域によって、いろいろな特性やマーケットがあります。ただ、大事なことは、市場経済の中で、いろいろな社会課題も含めて、楽しみながら、稼ぎながら、そして地域の皆さんが、幸せになれるようなことは、これはお叱りを受けるかもしれませんが、官の世界にいるだけでは、恐らくできないのではないかと思います。官の仕事は、常にその街や都市がどのようになるべきかということを考えて、街の将来像や、方向性を示すことで、これは官が責任を持って住民の付託を得てやらなければいけません。

ただ、どこまで細かく示すかというさじ加減があると思いますが民間の主体に徹底的に寄り添っていくことが大切だと思っています。ですが、制度の壁があってなかなか寄り添えない部分があるのも否めません。ボーダーレスを考えれば考えるほどボーダーがあるということを意識するような日々です。

そのようなことを悩みながらも、ボーダーレスというものが国土交通省の生産性革命プロジェクトの一つとして、昨年5月に位置づけられましたので、街の魅力を、それこそ言葉どおり、皆で高めていくために、官の役割というものを考えながら進めていきたいと思っています。今日は、自治体の方もいますので、ぜひ馬場さんと佐藤社長のシビアな現場の話を後半で改めてお伺いできれば、なお参考になるかと思っています。ありがとうございます。

田坂　ありがとうございます。ここで4時間というマラソンのような、ミーティングの中間の休憩を挟みたいと思います。正確な時計で10分後に、24分まで休憩を挟みたいと思います。まずは、サテライト会場を含めて、登壇してくださったコメンテーター、それから会場運営の皆さん、お疲れさまでした。後半

戦は、するどく都市経営というテーマに切り込んでいきたいと思います。また、皆さんのご参加とご協力を求めたいと思います。まずは前半でした、どうもお疲れさまでした。

司会（橋口）　どうも、ありがとうございました。それでは、ここで 10 分間の休憩に入ります。目安として 16 時 24 分になります。ホールを出たところに、トイレが 1 カ所ございます。エスカレーターで下りた、1 階の奥のお手洗いも利用可能ですので、ご利用いただければと思います。また、喫煙は所定の場所でお願いします。よろしく願いします。

（休憩）

トークセッション《 後半【未来を語る】》

●リアルタイムアンケート

司会（橋口）　それでは皆さま、お待たせいたしました。また、ご協力ありがとうございます。では後半を始めます。後半は、未来を語るというテーマで、都市経営としての官民ボーダーレスで進める、これからのまちづくりについて、トークセッションをしていただきます。

その前に、まず皆さんに事前アンケートにお答えいただいた、最後の質問のご紹介が残っていましたので、まずその集計結果をご紹介します。サテライト会場から先ほどご紹介いただいた活動場所で、皆さま方に、行ったことがある場所はありますかということを質問しました。どこにも行ったことがないとお答えいただいたものが半分程度という傾向です。ぜひ、今日の場所に皆さん足を運んでいただきたいと思います。

それから、先ほどもご参加いただきましたリアルタイムアンケートを後半のトークセッションの前に行いたいと思います。先ほどは、300 名を超える皆さんにご参加いただきましたが、2 回目ということで、ぜひスマートフォンをご用意いただきまして、ご準備をお願いします。

後半は、この二つの質問を用意しています。まず民の方にお答えいただきます。「まちづくりを進めるにあたって、信頼できる官のパートナーはいますか。」。こちらは民の方がお答えください。それから次は、官の方にお聞きします。「まちづくりを進めるにあたって、信頼できる民のパートナーはいますか。」という質問をお答えいただきたいと思います。先ほどお答えいただいた QR コードと同じ画面からご回答いただけるシステムになっていますので、先ほどお答えいただけなかった方も、ぜひ 2 回目からご参加いただきたいと思います。2 回目ということで、皆さん、お答えをいただけているという雰囲気はありますが、一応、スクリーンにもう一度スマートフォンの操作手順を映しています。ご不明な方がいらっしゃいましたら教えてください。こちらで見ている限り、皆さん、手慣れてお答えいただけたと思います。

では、ここで集計を締め切ります。サテライト会場も確認をします。お答えいただきましたら手を振って教えてください。ありがとうございます。前回に引き続きまして、ご入力いただきました皆さん、どうもありがとうございました。今、集計に入っています。休憩中もポスターセッションに足を運んでいただいた方もいらっしゃいますが、今日は 25 団体の都市再生推進法人の方

にポスターセッションとしてご協力いただいています。平成 30 年に新規に指定された団体もいますし、指定団体として活動歴の長い団体のポスターも掲載しています。本日の会が終わった後も、ポスターの近くに各団体の担当者がいますので、ぜひ取り組みについて情報交換をしてもらう場になればと思います。

それから、ポスターセッションの場に国土交通省の相談ブースも設けています。自治体の皆さまと民間のパートナーの橋渡しができるように、平成 31 年の予算案の取り組みなども含めて、個別のご相談も受け付けていますので、ぜひお気軽にお立ち寄りください。

また、先ほど休憩中にスクリーンで映した、全国各地の民間主導のモデルプロジェクトを集めたパンフレットなどもご用意しています。このパンフレットは、今日多くの部数を持ってきたのですが、皆さんにご好評いただいて、既に無くなってしまいました。国土交通省にも用意をしていますので、手に取ってみたいという方はお気軽にまちづくり推進課までお問い合わせください。

では集計結果がまとまりましたので、結果は田坂先生に、後半のトークセッションの始まりとともにお願いをしたいと思います。よろしくお願いします。

田坂　結果の表示をお願いします。民の方にお聞きします。「まちづくりを進めるにあたり、信頼できる官のパートナーはいますか。」については「いる」が 60%です。これはとても希望の見えることではないでしょうか。一方、60%しかいないのかという見方もあるでしょうか。60%の人が、「いる」というふうに答えています。

もう一つ聞きました。官の方に聞きます。「まちづくりを進めるにあたり、信頼できる民のパートナーはいますか。」について「いる」という方が 56%、もしかするとこれは、同じぐらいという言い方ができるのでしょうか。6 割程度の人は、官の方から、民の方から、パートナーシップがあるようです。

一方、40%が立ち往生しています。官には仲間がいない、民には仲間がいない、という状態をどうしていくかということは、もしかすると官民ボーダーレスということの大きな課題なのかもしれません。ご協力ありがとうございました。

田坂　さて、少し前半を振り返りながら、例えば、今、皆さんと一緒に聞いたサテライト会場の事例も、公共的空間をつくるにあたって、公共側からスタートしている事例、民間からスタートしている事例、それに対して、コメンテーターの方がいろいろな視点を持ち込んでいました。そもそも、このミーティングは、本当に公共的空間を民が担える社会を、一体我々はつくろうとしているのだろうか。ここで国土交通省という名指しの仕方をするのではなく、いったん、我々はというふうに言ってみましょうか。もしかすると、自信がないという陣営がいたとすると、それはなぜですかという捉え方をしてみましょう。その中で、一体皆、どの程度経営モードなのかというところが、前半の中でのトークセッションの柱になっていきました。行政を地元最大の投資機関と捉えるという考え方はどうかという捉え直しという提案も出てきました。あるいは実際の活動をしている方からは、地域と接点を持ちながら、新規事業を常に考えているということであり、まだ儲かっていない、今は辛抱のときだということや、包括的な効果を目論んでいるので、何も経営目線の売り上げや利益だけではない、包括的な効果ということについても、もしかするとメスを入れていく必要があるかもしれません。

佐藤社長からは二つのものが突破力になるという話がありました。それは民間のチャレンジと、公的なスタートアップやリーダーシップを担保する力で、それを正当化することで、そのチャレンジが行えるというモデルも示されました。小さなところからスタートするという話もありました。あるいは、変わり者が変えるという覚悟を持ったけれども、まだ辛抱だという話もありました。それから、動きは市民の誇りを取り戻す、あるいは治安維持への効果というものも実は大きなことではないだろうか、これらの社会課題も含めて楽しみながらやっていくということが、新しいエリアマネジメントではないだろうか。パブリックマインドをどう高めていくのか、あるいは、ギャップファイナンスのような仕組みを使いながら、どのように分担とマーケット開発をしていくのかということが、官民ボーダーレスの大きな柱になっていくのではないかということがありました。

ここからは 3 つのことをやりたいと思います。休憩時間を挟んで、コメンテーターの皆さんに前半からの議論の続きをお願いするとともに、たびたびサテライト会場にお話を振りたいと思います。また、ここにいる会場の皆さんには、バズセッションという形での参加をお願いするという、3 つのことを行って、最終的にはリレーアイデアという形で、このようなアイデアで突破できるというものを、ここに並べて、17 時 45 分というトークセッションの終わりを迎えたいと思っています。

前半の中で、都市経営という後半のテーマにどんどん迫っていたところがあります。すなわち、我々は言われなくても、都市経営のというところに軸足を移しつつあり、むしろ、そこでないと新しいエリアマネジメント、あるいはまちづくりの課題は解いていけないというところにあるようです。

改めて 4 人の方に聞きたいと思います。都市経営目線が良いことは分かりました。それを頑張りましょうと言いますと、今日がフォーラムであればそれで終われるかもしれません。しかし、必ずこのような疑問が入ります。うちは全然都市経営的ではないのに、どこから手を着ければいいのか、一つ一つの疑問は、できるだけこの時間の中で解消していきたいと思います。そこで、4 人の方への質問は、今までのトークセッションの流れから、これらのコメン

ト全てを都市経営ということにつなげて、言葉を紡いでもらうと、どのようなお話になりますか。都市経営ということをテーマにしながら、コメントをお願いします。これも順番は馬場さん、佐藤社長、保井先生、佐藤課長という順番でよろしいでしょうか。

馬場　都市経営は新しい概念です。僕ももちろん当たり前ですが、都市を経営したことがありませんので、的確な表現ができるか分かりませんが、分かりやすく言いますと、都市全体を企業のように見立ててみようという考え方だと思います。行政を企業のようにではなく、都市全体を企業のように見立ててみる。そうした場合、都市自体は継続しなければいけませんし、収益を上げなければいけませんし、産業を常に興し続けていなければいけないということになります。

その中で、例えば行政の立ち位置は、マネジメントです。いわゆる経営者側であり、都市を経営する側です。会社で言いますと企画経営部のようなところではないかと思います。そこは会社を経営するように都市を経営しなければいけませんので、どこにどのような財源を充てて、どこにどのような投資をして、どこで収益を上げ、今まで使われていなかったどこで収益を上げて、自分たちの企業の武器は何で、どのように外貨を稼いでいくのかということのマクロ視点で考えることが企画経営部の仕事なのでしょう。

プレーヤーである僕たちは、マクロ目線を持つ前に、目の前の自分たちの結果や収益に、どうしても目がいきますので、当たり前ですが短期的にものを見ることになると思います。ですが、短期的にものを見て、短期的に経済を回していくというプレーヤーです。そういう意味では、視界のスパンが、僕らプレーヤーは比較的短いでしょうし、企業としてはそれなりの企業が考えられるのですが、都市が企業だというふうにするのであれば、もっと長いスパンで考えて良いわけです。企画経営部としての行政は、20 年、30 年、もしかすると 100 年単位で、そのエリアを見ても良いのではないかと思っています。

ただ、今まで都市を経営するという感覚があまりなくて、税金や国からの財源をどこに割り振るかというところに、随分意識が集中していたような気がします。ですが、そこに投資をすると、どのような収益があるか、どういうリターンがあるのか、結局都市全体が新しい産業を生まないと、どんどん収益は下がっていきます。企業に魅力がなくなるかのように、当然、収益が下がる都市には魅力がなくなり、そこに新しい住民も入ってきませんし、新しいプレーヤーは新しい事業を興す気にもなりません。要するに会社が活性化しないということです。ですので、都市全体を会社のアナロジーにして語ってみますと、ぼんやりしていたものが少しクリアになるのではないかということを都市経営という単語から感じる気がします。

しかし、今まで行政の方々は、当たり前ですが経営をほとんどやってきたことがないわけです。その辺りの経験とノウハウは圧倒的に佐藤さんのような民の方にあります。そうであれば、民の経営的な判断や経営的な手法を、どのように都市へ、すなわち行政へインストールしていくのかは、今のところ、その仕組みが日本にはあまりないと思います。海外の場合は、人事も行政の人

が民間に行って、民間の人が行政に行くような、人材の流動化が激しいのでそういうことが起こるのですが、日本ではそこがなかなか起こりにくい構造になっています。そこは一朝一夕に直るとは思えませんので、それをどうするかということを考えなければいけないのではないでしょうか。

前半は、僕はどちらかというと民としてゲリラ戦を戦うようなモードでしたが、後半は都市経営という単語が出てきましたので、少しマクロ的な視点を持たなければいけないと思いました。問題意識と、今の事象の捉え方ですが、そのような感覚で都市経営という言葉をつかまえようとしています。

佐藤裕久

今の馬場さんの話を聞きながら、気付いたことがあります。例えば、今大津駅をやっているのですが、駅ですが民間鉄道会社の物件ではあります。カフェは2階でやっていて、1階は大津市の観光案内所を我々が運営をしています。我々は実は二つの視点を持たなければいけません。民間としての収益性と、今おっしゃった都市経営として、行政が収益性を持たなければいけません。ただ、恐らく収益の見方が違うのだと思います。観光案内所は、あくまでも公的機関ですので、非常に広範囲の地域に根差す必要があり、赤ちゃんから高齢の方まで、いろいろな職業の方、いろいろな方を含めて共有項としてのプロスピリティ（繁栄）が必要です。

それをやっているときに、いったん自己矛盾に陥りました。より収益性を上げていくことが正しいのではないかと思い、観光案内所で大津市の生産者、製造者の方たちのものをおみやげとして売ろう、駅の物件ですから売った方がいい。ですが、それは公的施設ですので、売って収益を上げてはいけませんという答えが出てきます。それはおかしくありませんか。僕は、そこで駄目ですと言われても、はいというタイプではありませんので、おかしくありませんかと言います。僕たちが収益を上げたいために言っているわけではありません。いろいろな製造者の方で、個人でやっている方はお披露目する場所がありません。そのようなせっかくの場所ですので、やりましょうということで、最終的には10%のマージンを我々がもらうということになりました。来たものをそのまま売りますと、税務上の問題もありますので、そういうことを含めてやっているときに、ふと気付いたことは、先ほど宇部の、自分は変わり者だとおっしゃった、カフェの経営者の方に心からエールを送りたいということです。初めてやる人は、誰もやっていないことをやりますので、そのリスクの大きさにも気付きませんし孤軍奮闘していかなければいけません。このような進め方は苦しいです。あえて言いますと、商工会議所や、いろいろな団体が集まってきた団体の方に対して、絶対に心がけてほしいことがあります。唱和的な結論に持っていくのであれば、その団体は解散してください。そのようなものはいりません。

つまり、例えばこういうことです。フルーツパフェがありますが、バナナ、パイナップル、チェリー、アイス、シリアルなどが混ざっているからおいしいのです。雑多性です。ですが、唱和的な結論を出す人たちは、それをミキサーに掛けてスムージーにしてしまいます。フルーツもシリアルもアイスクリームも混ざって、皆で同じ色に仕上がったと言ってしまうのです。しかし、これ

からの地方自治体は、そこに持っていく個性や灰汁など、とがり部分を失うと大きい都市に負けるに決まっているではないですか。某大手の世界一のコーヒーチェーンを持ってきて、にぎわいが出たと言っていますが、それはその街に住んでいる人にとっては良かったけれども、その街にわざわざ来ようという人に、その店は訴求しますか。鳥取に行くなら、すなば珈琲に行きたくありませんか。僕は、すなば珈琲はどのようなものか、本当に砂があるのだろうか、というような気持ちになります。

収益性を考えると誰もリスクを負えませんので怖がりますが、誰かに託してみる。変わり者だとおっしゃった彼に、頑張れと応援したい。まだ売れていないアーティストが、何か心に響くのであれば賭けてみるというような、度量や技量を、行政や公的な団体の方が持っていることによって、都市経営という言葉が本当に生きてくるのだと考えます。青年の主張ではなく中年の主張でした。

保井　もう今、言っていただいた気がします。都市経営というものが最近言われているのは、直接的には財政難であり、問題の構造的な変化なのだろうと思います。ですので、人、もの、金がもう一度回る仕組みを、きちんとゼロから考えようという話であると認識しています。今まで出てきた話に関連するのですが、日本で地域を考えるときに都市経営は出ませんが、欧米では必ず出てきます。パブリックスペースの話でも、必ず出てくる言葉があります。それは「デモクラシー」です。例えば、最近スウェーデンでできたパブリックスペースの研修機関のようなところも、新しいデモクラシーをつくっていくということが、わざわざ書いてあるわけです。やることは、パブリックスペースの使い方です。

これは、佐藤社長がおっしゃったことにすごく近いと思っていて、今まで、民間企業に対してもそうですが、いろいろなことが受け身になってきましたので、プロが育っています。レストランに行けばおいしいものが食べられるし、行政に行けば、このようなサービスが得られるしという意味で言いますと、私たち市民は基本的には受け身になっています。ところが、いつの間にかいろいろな問題がたくさん出てきていて、いかんともしようがなくなっています。しかも、それが地域によって違うという中で、皆身近なことからもう一度考えてみよう、そしてやれることをやろうという動きがいろいろ出てきていて、それがある意味新しい都市の経営というように、大上段に構えなくてもいいのではないかという気がします。私たちの住む街を、もっと私たちのためにつくっていくというようなムーブメントなのだろうと思います。

ですから、そこで言いますと、お金も回さなければいけませんし、私たちがほしい街はどのような姿なのかを考えなければいけませんし、それに対してチャレンジしようという人に何かを付託するような仕組みを考えなければいけませんし、スタートアップを応援する仕組みも考える必要があるかもしれません。そこが今までの組織、あるいは、今までの組織にひも付いた仕事の仕組みを、淡々とこなしていては解けませんので、官も民も超えて、場合によっては行政の中で部署を超えて、民間も単一の企業を超えて、プロジェクトを

組んでプロジェクト単位でやっていく、そのマネジメントをやることがもちろん行政にも求められていますし、それぞれのエリアの中にできつつある公共的な役割を担うエリアマネジメントの組織にも求められているのではないかと思っています。

佐藤守孝　お三方に全て言い尽くしていただきました。自治体経営とよく言われますが、都市の経営だとしますと、これまで首長なりが一生懸命苦労して、それぞれの地域の活性化を図ろうとしているというところだと思います。おっしゃるとおり、経営そのものはなかなか難しい部分もあるわけです。

この場で一つだけ、先ほどできなかった制度の説明をします。都市再生推進法人の方が多く集まっている会議でもありますので、都市再生推進法人という仕組みが、もしかすると市町村を支える、あるいは地域の民間団体と連携して、現場を動かしていける仕掛けなのかもしれないということで、ご紹介をしたいと思います。

今申し上げたことは、資料 2 に都市再生推進法人の仕組みが書いてありますが、都市再生推進法人には市の出資要件はありません。平成 19 年の創設当時はあったのですが、それを撤廃して、市町村との資本関係はいらない仕組みです。社団財団でも良いですし、NPO でも良いということで、その地域の状況に合った民間の団体が、市町村の意を汲みつつ、地域の現場で苦労をしている民間プロジェクトとの間に立って、パブリックマインドを持ってやってもらう方が増えてきています。マネジメントやデザイン、リノベーションなどは非常にかっこいい言葉なのですが、恐らくそれぞれの地域で、本当に意味があるからこそ人々が集まって、そこに来る、そしてそこで何かをやる、そういった場所が良ければエリアの価値が高まり、必然的に再開発などにもつながっていくということではないかと思っています。

馬場　都市再生推進法人会議の話は、先ほどのように都市を経営だとして見立てると、社内ベンチャーを誘発するための制度のように見えます。企業が社内からどんどん新しい部署や、社内ベンチャーがテイクオフするようなことを仕掛ける時代になったのと同じように、行政も地域からベンチャーが起こるような制度設計を始めていることが、都市再生推進法人だという気がしています。例えば、Park-PFI がありますが、あれは会社に外からのファイナンスが入りやすい仕組みをつくっている気がしていて、その辺りも、今まではどちらかというと行政は行政でという独特の形態をとっていたと思うのですが、都市も民間も行政も、その境界が少し曖昧になっているのではないでしょうか。役割はもちろんばらばらですが、そのような見え方をしていましたので、口を挟みました。

佐藤守孝　ありがとうございます。そのように言ってもらうことは初めてです。都市経営としてみると、都市再生推進法人が社内ベンチャーを誘発するという見立てには、刺激を受けました。ありがとうございました。

田坂　ロベルト・ベルガンティという人は、1970 年代まではイノベーションは技術のイノベーションでしたが、1980 年代以降は市場のイノベーション、お客さまは何を考えているのかということが、イノベーションのエンジンになってきたということを言っています。しかし、21 世紀になってからは、意味のイノベーションが大事で、それをどう捉え直すかということを、今我々は問いかけられています。まさに、このように例えを使いながら、それは何かということの言う表現を変えることによって、何かが変わってくる可能性があります。ですから、都市経営とは何かということについて、我々が自分の言葉で捉え直しをしながら理解していくと、その街の都市経営の突破口、切り口、入り口が見つかっていくのかもしれません。官の視点と民の視点が、今まで固定的だったものを、徐々に変えていき、そここそをボーダーレスにしていきます。もしかすると、局長の冒頭挨拶にありましたが、それは空間のボーダーレス、プレーヤーのボーダーレス、エリアのボーダーレスを超えていくのだということを言っていました。もしかすると、このようにわれわれの視点のボーダーレスということも必要になってきているのかもしれません。

その中で、ぜひ、変わり者にエールを送ってください。実はこれは突破口のアイデアの 1 つだという言い方ができるのかもしれません。変わり者が変えるという発言が、これこそがサテライトから出てきた発言でした。サテライトに振ってみていいでしょうか。後半の都市経営がキーワードになってから、今までのトークセッションのトークを聞いていて、サテライトの方はぜひコメントを挟んでください。ということで、同じように札幌の方、一言、福井の方、一言、宇部の方、一言いただけますよう、よろしくお願いします。

服部　田坂先生、ここは変わり者とおっしゃっていた、宇部からスタートした方が良いのではないでしょうか。

田坂　鋭いご指摘をありがとうございます。そうしましょう。宇部の会場、よろしくお願いします。

小林　お話を振っていただいて、ありがとうございます。我々はコンテナで活動をしていく中で、実は運営スタッフにも民間の方が入っています。デザイン会社といいますか、もはや何でも屋になっているのですが、変わり者というこ

とで紹介します。

江本（360° Image Works）　宇部市にありますサブロクイメージワークスという民間の会社の江本と申します。よろしくお願いします。貴重な時間をありがとうございます。

先ほど、カフェのオーナーが変わり者というところで、あそこが非常にフックになって話を振っていただいたのですが。ここのYCCUがある場所は、集客などが本当に厳しい状況です。民間が入って行っている活動として、資料の中にもあったと思うのですが、ビアガーデンなど、行政の力を借りながらも行政ではできないようなものを発信しています。また、昔のにぎわいを取り戻す活動として、かっこいいことで若者を呼んできたりしています。

そこで私たちの会社として民間の力でできることは、例えば先日行ったフェラーリやランボルギーニなどのスーパーカーを持っている方を呼んで、そこに興味がある人に来ていただくイベントを開催したり、この地域で美容室をオープンした方に来ていただいて、青空美容室という形で、お店のPRも兼ねて無料で髪を切ったり、少しずつ変わったイベントを行っています。ただやるだけではなく、私たちはかっこよく見せて情報発信をするために、カメラマンを入れて写真を撮ったり、動画を撮ってみたり、当然、来ていただいた方たちの記憶にも残るのですが、こういった発信していけるように記録にも残していくことも心掛けて、山口大学と一緒にやっています。

小林　ありがとうございます。宇部市の活動の中では、変わり者がキーワードになっていて、変わり者が次の変わり者を集めてきて、先ほどの、佐藤社長のお話の中で、パフェがスムージーになってはいけないというお話があったのですが、とてもスムージーになりようがない、固いだけのキャラクター、そういった人間を集めて、どんどん仲間を増やしていくことが、活動としては大事なのかと思います。特に、変わり者を集める上での基準は、少しでも公的な活動に興味がある人たちを、なるべく仲間として集めるように活動しています。とりとめもない話になってしまいましたが、以上です。

佐藤裕久　先ほどのカフェをやっている方は、もう帰ったのでしょうか。

小林　実は、この後の我々の懇親会の準備をしています。（笑）

佐藤裕久　売り上げが大事ですからね、分かりました。（笑）

田坂　では逆順で、福井会場にお願いします。

岩崎　福井は先ほど少しお話ししたように、再開発のような大きい事業から、民間のリノベーションまでいくつか段階がありますので、それぞれお話をしたいと思います。

今の都市経営という部分で言いますと、中心市街地活性化基本計画のときは福井市の中心市街地 105ha が指定を受けていたのですが、よく言われることは、その面積は福井市全体の面積でいいますと約0.2%なのですが、そこが稼ぎ出している固定資産税は、福井市全体の、固定資産税の収入のうち7%になっています。ですから、非常に投資効率の良い場所であることは間違いありません。そういったところに、行政がどのように投資をしていくか、それをどう固定資産税や住民税等で回収していくかということになるのだと思います。今の再開発事業ですと、それなりに大きい補助金が入ってきます。それを

いかに、固定資産の評価額を上げるためにもっていくか、行政サイドで考えますと、そういうところが都市経営の一つの考え方なのだろうかと、先ほどお話を聞きながら思っていました。

そういった大きい部分が一つと、もう一つはリノベーションや新栄テラスでの取り組みで、それぞれお話を聞いてみたいと思います。

宮田　新栄テラス運営委員会です。もともとこの場所は、火事で焼けてしまった約100坪の土地を、駐車場の業者が借り上げて駐車場にしていました。ただ、そのような低未利用地を市街地につくることは、いかがなものかということでしたので、福井市が持っている駐車場と、そこの利用権を交換して、土地自体の地代は駐車場の会社に払って、我々はその上を運営委員会として使っているという形です。ですので、お金が入ってくるというわけではなく、どちらかというと、そういったスキームを市につくっていただきました。それに合わせて、運営委員会としてどのようににぎわいをつくるかということを考えながら実行してきました。

浅野　私は民間で、アートを軸にした活動を福井の街でやろうとしています。そもそもその活動が官の役割も担っているような感じがありまして、実際に動いている者の感覚としては、官と民が頻繁に意見を出し合ったり、情報交換し合ったりするところから、もう少し密度を高めて、その次のいろいろな補助、対策、サポートといったところを、お互いに話し合っていけばいいのかなと感じています。

岩崎　福井は地方都市ということもあって、なかなか民の力だけで大きな動きを始めるということは、ハードルが非常に高く感じます。その中で、このような小さい動きがたくさんあり、大きい動きもあるということは、すごく今、大きなチャンスだと思っています。それをいかに都市経営に結びつけるかという部分は、もっと行政も意識しなければいけませんし、地元で活動している我々も、何かしら意識すべきだということを、今のお話を聞きながら思っていました。田坂先生に一度お返しします。

馬場　僕は福井によく通っていますので、一言、よろしいでしょうか。今福井が面白いところは、新幹線が来ることで、資料で言う右側（東側）に再開発エリアがあって、左側（西側）にリノベーションエリアがあります。右側は再開発の話は進んでいますが左側は再開発の話は進みません。駅を出て、右は再開発、左はリノベーションまちづくりで、ある意味対照的な風景が並ぶことになります。ですが、僕は再開発とリノベーションが対立概念であるとは思っておらず、都市全体の経営がきちんとしていくためのプロセスであると思っています。再開発が正しいかどうかは詳しく知りませんので、分からないところはありますが、どちらにいこうが経営として最適な解答はどちらなのかという判断を、都市として冷静にするタイミングなのだろうという気がします。再開発が進んでいるとするならば、再開発とリノベーションをうまくバラン

シングして、都市の魅力を総合的に見せていく方法は何かを考えなければいけません。

ヨーロッパであれば、旧市街と新市街があり、両方があることによって、その都市の魅力が語られたりもします。福井を見ていると、新幹線というカンフル剤がやってくるわけですが、それが他都市に引っ張られるのか、観光客を呼び込むことになるのかは、そこにかかっていると言っても過言ではないと思っています。この4、5年の都市のプログラムが、ものすごく次のベクトルをつくるというふうに思いますし、エキサイティングな状況にあると思います。

田坂　ありがとうございます。もしかすると対立概念ではなく、それはプロセスという引き受け方もあるかもしれないというところですね。

それでは次に、札幌会場、よろしくお願いします。

服部　それぞれ三つのまちづくり会社の感じていることを一言ずつお話します。まず私の方から、札幌の場合は、都心部である札幌駅周辺、われわれ既成市街地の大通り、すすきの、創成川東という、それぞれエリアの特性を持ったところで、それぞれエリアごとに活動するまちづくり団体組織があるというところがあります。団体組織そのものは、札幌大通まちづくり株式会社を含めて、いかに主体性を持っているプレーヤーなどの方々と一緒になってやっていくかというところを、非常に大切にしています。

そういう意味では、馬場さんが書かれている本の『公共 R 不動産のプロジェクトスタディ』にも書かれていますが、エージェントコーディネートという役割も一つ思念としてはあるのではないかと思います。

内川　札幌のまちづくり会社たちは、マネジメントもする一方でプレーヤーでもあるという、両方の役割があるのではないかと思います。それがなぜできるのかと考えたときに、それぞれの会社ができたときには、まちづくり会社たちは何者なのかと地域の人でも分からない存在だったのではないかと思います。特に私はそう思われたと思うのですが、それを行政の皆さんが地域とつなぎ留めてくれて、その積み重ねで私たちはマネジメントでもありプレーヤーであるという状態になれているのではないかと思っています。

同じ考えしか持っていない人が街にいても、あまり面白いものにはならないと思っていますので、キャラクターの濃い人材が必要だと思います。それがまちづくり会社にいても良いでしょうし、外の人と一緒に手を組むということも、一つあるのではないでしょうか。そういったプレーヤーを私たちは探したいと思って、シンクスクールを行っているのですが、そこからも人材は生まれてきていますので、このように待っているだけではなく、一緒にプレーヤーを探していくということも必要ではないかと思っています。

近藤　なかなか難しいところですが、うちの活動は駅前通まちづくり株式会社や札幌大通まちづくり株式会社と違い、誰かから何かを付託されて始めているところが全くなく、まさに変わり者といいますか、お節介、物好きが、この街は何かもったいないという想いを持って集まったところからスタートしています。

【札幌会場】

そういう意味では、先ほど内川さんがおっしゃったように、自分たちはプレーヤーであり、マネージャーというよりはプロモーターという形で振る舞っていると思います。全てを自分で抱えるのではなく、人もきちんと掘り起こさなければならず、自分たちがプロモーションをしながら、地域が活動していくためのステージを創っていくということが、持続的という意味では非常に大事だと思っています。

服部　ということで、札幌から田坂先生にお返します。

●Buzz Session2

田坂　ありがとうございます。ホワイトボードへの板書は発言録にしています。ここで、ぜひ会場の皆さんの会話、対話を促進していきたいと思います。ここまでのところはいかがでしたか。後半に入って 50 分程度経っています。その中で、もし琴線に触れる言葉があれば、こういうものをうちの街に持ち帰りたいということがあれば、ぜひそれをあなたの表現に変えて、あなたの口からそれを出してください。

そして、前半のバズセッションに加えて、この後半では、程なく私も含めて壇上の 4 人の方はフロアに下りたいと思います。バズセッションの中では、どのようなことがバズワードになっているのか、どのようなことを会場の人たちは拾っているのかということをつかまえながら、5 分ほどたちましたら、マイクを使ってコメンテーターの方はお戻りいただけますかという言葉を掛けますので、戻ってきていただいて、会場とのやりとりでこうなったということを、そろそろ会場の方の手を借りながら、収束に向かっていければと思っています。

【東京会場】

では、今度は後半の都市経営という言葉についてのトークセッションについて、フロアではどのようなコメントがあるでしょうか。お隣や近くの方との会話、先ほどの人と同じでも違う人でも結構ですので、会場での会話に取り組んでみたいと思います。よろしくお願いします。5 分たったら声を掛けます。

（Buzz Session２）

【東京会場】

【札幌会場】

●トークセッション　～トークセッション前半・後半をうけて～

田坂　さて、いかがでしょうか。話は尽きないのかもしれません。あるいは、とにかくここにいらっしゃる方全てのコメントを拾うことができれば、それに超したことはないのかもしれませんが、無作為抽出のような形になったでしょうか。4 人の方にお答えいただけると助かります。つかまって離してもらえない人はいますか。それも踏まえて、もしフロアの会場にいる皆さんの言葉で印象に残ったもの、あるいは、それに付随して最後に 4 人の方からコメントをいただいて、それで徐々に収束に向かいたいと思っています。会場の方からいただいた言葉や、そのときにご自身が考えたこと、その他、今のところでの頭の中を教えていただければと思います。同じ順番でいきたいと思います。4 人の方のコメントをいただいて、そして総括、収束に向かっていきたいと思います。よろしくお願いします。

馬場　僕が拾った中で面白いと思ったことは、税制に関してでした。いくつか聞いたのですが、例えば公園で何かをやったとすると、そこで上げた収益は、本当は公園の新しいアクティビティなどに還元したいけれども、そこで売り上げが立ってしまうと、税金で持っていかれて、当事者としては何に使われるか分からないお金になってしまいます。だとすると、パブリックに資するところだとすると、公園に再投資するという意味では、その税制のあり方はどうなのかという疑問を呈していました。僕も、都市経営といった場合は、税制の有り様ということにメス入れることは本当に難しいことだと思います。

例えば、今、ふるさと納税というやり方ができた途端に、税制の方法、税の取り分が全く変わりました。今は返礼品狙いのふるさと納税です。もう既に始まっている自治体もありますが、この街のこの政策に納税したいという目的性の高いタイプのふるさと納税に変換していくと、返礼品狙いではなく、正しい政策に対して直接納税したいという税制のデザインになり得ます。そういう意味では、都市経営という方針にできない、まだ地方自治体に税制の権限は委ねられていませんが、次の時代はもしかすると税制のデザインはすごく大きなヒントになるのかもしれないという声を拾ったことが面白かったです。

田坂　ありがとうございました。

佐藤守孝　今お話を聞いて、実は私がお話をした方々は、ふるさと納税に関する事業を始めた、あるいは始めるという方がいました。もしよろしければ、ふるさと納税をまちづくりに活用ということでご紹介をいただきたいと思います。

岡本　桜井まちづくり株式会社の岡本です。私どもは、桜井市と商工会と、我々まちづくり会社が組んで、ふるさと納税の返礼品事業に取り組んでいます。1 年半ほど前から取り組んでおり、たまたま有田町が行っていたやり方をまねたのですが、具体的に市自体には年間 500～600 万円程度しか収入がなかったのですが、我々と商工会が組んで、取扱商品が 16 品種から 500 品種に増えました。結果、収入は 1 年で 1 億円になりました。市長も街も喜んで、街の商品も全国に売り出すことができました。その手数料収入を、我々まちづくり会社のベースの収入として、従業員の人件費に充てています。これは街の産業のいろいろな産品が全国にアピールできて、かつ、それが売れるということです。そして、我々自身も手数料収入を得て、ベースの収益を上げて、それをまた再投資できます。その中で、古民家を改修してカフェを作り、銀行跡を改修してレストランを作りました。また、古民家を改修して街宿も作りました。これをパッケージにして、ふるさと納税の商品として挙げました。こちらも全国からお求めいただいて、我々の収入になっています。全ての事業者にも収入が入ってくるという仕組みをつくっていこうとしている最中です。

佐藤裕久　それを受けていいですか。実は僕、トライアスロンをやっています。愛知県の知多半島で、常滑市が、エントリーをするのも大変なアイアンマンレースという世界的なイベントを開催しているのですが、ふるさと納税でかなり資金を集めています。運営も市がやっていますが、自転車で 90km、マラソンが 21km、スイムもあってフルマラソンより長い距離です。運営に大変な費用がかかるはずです。僕たちは経営者ばかりのトライアスロンチームですので、皆は一応まあまあ納税をしています。賞状がもらえる程度でリターンは何もありませんが、何かがほしいのではなく、街の一つのイベントを盛り上げていくために使われているふるさと納税が、他にあるのかは分かりませんが、秀逸な例だと見ていますので、僕も当然納税しています。

佐藤守孝　ありがとうございます。今の桜井まちづくり株式会社は、資料 4 の 20 ページに書いてありますので、後でご覧ください。

田坂　改めてお二人、フロアの皆さんとの、交流の中で、何かありましたらお話を聞かせてください。

保井　４つあります。今の流れで言いますと、都市経営ということになりますと、今のように税収を増やすということや、あるいはまちづくり会社が収益を得て、それを公的な課題に還元するという仕組みづくりではないかという話があります。そういう話がある中で言いますと、例えばエリアマネジメントの範囲設定も実は課題になりますという話が出ていました。ただ、そういうものは大都市と地方都市によっても違うのではないかという話もある中で、質問が範囲設定の考え方や、いくつか質問が出ていましたが、そういう範囲設定、それから収益と、それをいかに還元していくかというようなことの考え方が論点として出ていました。

もう一つ、非常に大事なことは楽しくなければいけないという話です。これは確かに、官と民でやっていくので、がちがちにやっていくのももちろんあるでしょうが、それだけだと続きませんので、皆が笑いながらできるような、やりたいことを一緒にやっていくというような、笑いのあるまちづくりが大事ではないかという話でした。

あと、ぜひ言ってほしいとおっしゃっていたことは、今日のこの会議が素晴らしいということです。国土交通省の方が手作りで、このような形の会議をやろうとしたということに、ぜひエールを送りたいという話が出ていましたので、それはぜひお伝えします。

佐藤裕久　僕は拾いきれなかったかもしれないのですが、全国の自治体の方の本心と言いますか、声だったのかなという言葉が聞こえました。以前栄えた商店街、街の中でのまちづくりを担う立場の方が、2代目、3代目になったときに、エネルギーがだんだんと落ちてきた後にどうやっているのかということに対して、しかも昔からの利権もあるいろいろな人たちを、どうさばいていくのかという難しい問題を抱えながら、動けないという感じのことを二つの行政の方から感じました。これは、そこだけのことだけではなく、恐らく日本中で起こっていることだと思います。

その中で、僕なりの勝手な解釈としては、誰か覚悟を持った人が、極端に言えば失敗しても殺されないだろうぐらいの覚悟でいかないと突破できない状況に陥っているのではないでしょうか。その中で、先ほど言いましたように覚悟を持って、しかもその街を愛して、その街で何か頑張ろうと思っている人たちの背中の一押しを、役所なり行政がやっていただけると、恐らく彼らも一歩を踏み出せるのではないかと思いました。

保井　私も一つ言い残したことは、同じ話でした。まさに人ということに焦点を当てた議論がありましたが、そこに至るまでには、かなりいろいろな苦労があって、地域の方との調整の中で、もう投げてしまうようなときもあるはずでしょう。そこをどのように乗り越えたのかと思ったという話がありました。今、佐藤社長が死ぬ覚悟でやれとおっしゃって、本当にそのとおりだと思いますが、もう一つ、もう少し現実的なオプションを付け加えると、今日は田坂先生もこのようにやっていますが、対話の力が結構あると思っています。変わり者と街の名士の方は、理解ができないから基本的には話しません。話そうともしませんし、いがみ合っているような世界が結構ある中で、そこをどう出会わせるか、しかも今日のような佐藤社長がおっしゃった正論を否定する人はいないと思います。

ですから、そこをきちんと共有していくような対話のデザイン、そこを意思決定していく覚悟の場づくりが、非常に大事なのではないかと思いますし、そこに向けてのプロセスをつくっていくことこそ、エリアマネジメントの大きな仕事の一つなのではないかと思います。

田坂　ありがとうございます。私に与えられている時間が17時45分までですので、なんとあと6分もあります。この後、いったんこのトークセッションを通して、もしかすると司会の橋口さんからサテライトの皆さんに手を振ってもらうような時間を設けていらっしゃるかもしれませんが、まずは私からも、サテライトの皆さんに、この東京会場と遠隔地を結んだ、良いトークセッションができたことを、サテライトの皆さんに感謝を申し述べたいと思います。そして、バズセッションという形で、このトークセッションにかなり

の深みを与えてくださった会場の皆さんにも感謝を申し上げたいと思います。

前半は我々を駆動してきた一つのテーマは、本当に我々は公共的空間を民が担えるという社会をつくろうとしているのだろうかというところで、民の感覚を持とう、経営目線を持とうということがありました。民間のチャレンジ力と公的な担保力、スタートアップ力、リーダーシップというものがあれば、そこにはさまざまなものを乗り越えて、リスクをお互いが分担し合いながらマーケット開発ができていく、そのためには、例えば小さなところからのスタートが一つのコツであるし、Park-PFI のようなやり方や、あるいは一緒に悩むというキーワードもありました。そして、最大のキーワードは変わり者が変えるということだったように思います。あるいは、動きは市民の誇りを取り戻すということは、もしかすると我々が、エリアマネジメント、まちづくりをする重要な一つの目的ではないでしょうか。動きは市民の誇りを取り戻す、そのためにやるということは、たくさんの目的の中でも、ひときわ輝く目的になることができるのではないでしょうか。また、楽しくなければ社会課題に眉間にしわが寄っているだけになってしまうから、楽しくやるのだということも一つありました。

そして後半では、一つは都市を経営体と見立てるのであれば、どのようなマネジメントがあり得るのか、どこで収益を上げ、どういう武器を持つのかというマクロの視点と、民間のテクニックや経営判断力や経営手法というものを捕まえながら、それがボーダーレスに協力し合えるような形をつくっていこうというものが一つあったように思います。そのためには、多様性と、プロセス、人というものが大きなテーマカテゴリーになったのではないかと思います。同じ考えの人でできた街は面白くない、これが一つの名言だと思います。同じ考えの人でできた街は面白くない、個の個性を失っては、全ての街は負けてしまう。だから変わり者にエールを送ることが、その街の度量であるということです。

そして、プロセスでは、例えば都市再生推進法人を、社内ベンチャーを支援する部署だと捉えて、そこでコーディネートをしていくようなプロセス、あるいは、再開発とリノベーションが対立する概念ではなく、プロセスなんだという理解をすることや、覚悟やエネルギーを持った人の背中を押せるような、プロセスや場づくりを進めることで、皆がやれることからやるというところ、長大な計画を立てるのではなく、やれるところからやる、私たちの街を私たちのためにつくり直すのだというものを、都市経営の根幹と呼ぼうというトークができたのではないかと思います。そのための一つは、もしかすると税制もヒントであるし、官の視点と民の視点をボーダーレスにしていくということもヒントになります。

最後に、人というテーマカテゴリーの中では、地域の人をプレーヤーに仕立てていくということであるとか、行政の力を借りて、行政ではできないことをやる、そういうことを変わり者がやる、変わり者は必ず次の変わり者を集めてくる、そして、もしいないのであればマネジメントもプレーヤーもプロモーターもするということで、できる人は何でもどんどんやるといういう焦点の当て方も、一つあったように思います。ファシリテーターとして、今、ファシリテーションというものは単純な合意形成ではなく、信頼できる仲間とタッグを組んで、全く相容れない考えの人とも、いかに多様なままで共同作業をつくっていけるかというところにきています。あなたと私は考えが違う、だから協働する価値があるというところにいこうとしています。ですので、たくさんのものがごちゃ混ぜになって、そしていろいろなものが渦巻い

ている街こそ、活力のある街であり、そしてその街の動きが市民の誇りを取り戻すのです。

最後に、アダム・カヘンという、アパルトヘイトを終わらせ、ポルポト派を解放した、世界の１本の指に入ると言われるファシリテーターの言葉を紹介して、この場を閉じたいと思います。彼はこのようなことを言っています。あなたが解決策の一部でないのであれば、あなたは問題の一部側にいます。あなたが解決策の一部をなしていないとするなら、評論しても、本則を話しても、何のことはない、あなたが問題なのです。ところが、問題の一部でなければ真の解決策にはなり得ません。問題の一部だという自覚を持っている人こそが、真の解決策をつくっていきます。これがアダム・カヘンの言葉です。

4 時間の長きお付き合いをくださった皆さん、トークセッションをこれにて終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

司会（橋口）　田坂先生、コメンテーターの４名の皆さま、長時間にわたりまして熱いトークセッションをありがとうございました。それから、サテライト会場のレポーターの皆さん、今スクリーンに４会場全て映っていますが、今日はどうもありがとうございました。皆さま、拍手をお願いします。回線の乱れなどで少し聞き苦しいところや、見苦しいところがあったかと思いますが、会場の皆さまにも温かい目で見守っていただいて、また、バズセッションやアンケートに当事者として関わっていただきまして、本当にありがとうございました。田坂先生とコメンテーターの皆さまに、もう一度大きな拍手をお願いします。

ではコメンテーター、モデレーターの皆さまは、席に一度お戻りください。それから、田坂先生にまとめていただいたホワイトボードは、引き続き壇上に置いておきますので、写真などを撮られる方は、後ほどお時間をとりたいと思います。ありがとうございました。

最後に、横浜国立大学名誉教授で、全国エリアマネジメントネットワークの小林重敬会長より閉会のご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

閉会

●閉会の挨拶　　全国ｴﾘｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄﾈｯﾄﾜｰｸ会長／小林重敬

閉会のご挨拶をさせていただきます。

よくこのような企画を考えましたね。4 時間で休みは 10 分だけで、しかも登場している方が疲れも見せず、しっかりとした発言をされて驚きました。特に田坂先生は、まだやっています（笑）。ただ、4 時間という長きにわたって、しかも会場が３つプラスアルファにされている中で、これだけうまくマネジメントできました。マネジメントをしている人たちに、ぜひ拍手をお願いします。

先ほど、少しいろいろなところがあったという話でしたが、私の目から見ると、大変うまく運営されたと思います。こういうことをやりますと、どこか 1 カ所ぐらいはおかしくなって、仕方がないからさようならとなるものですが、そうなりませんでした。

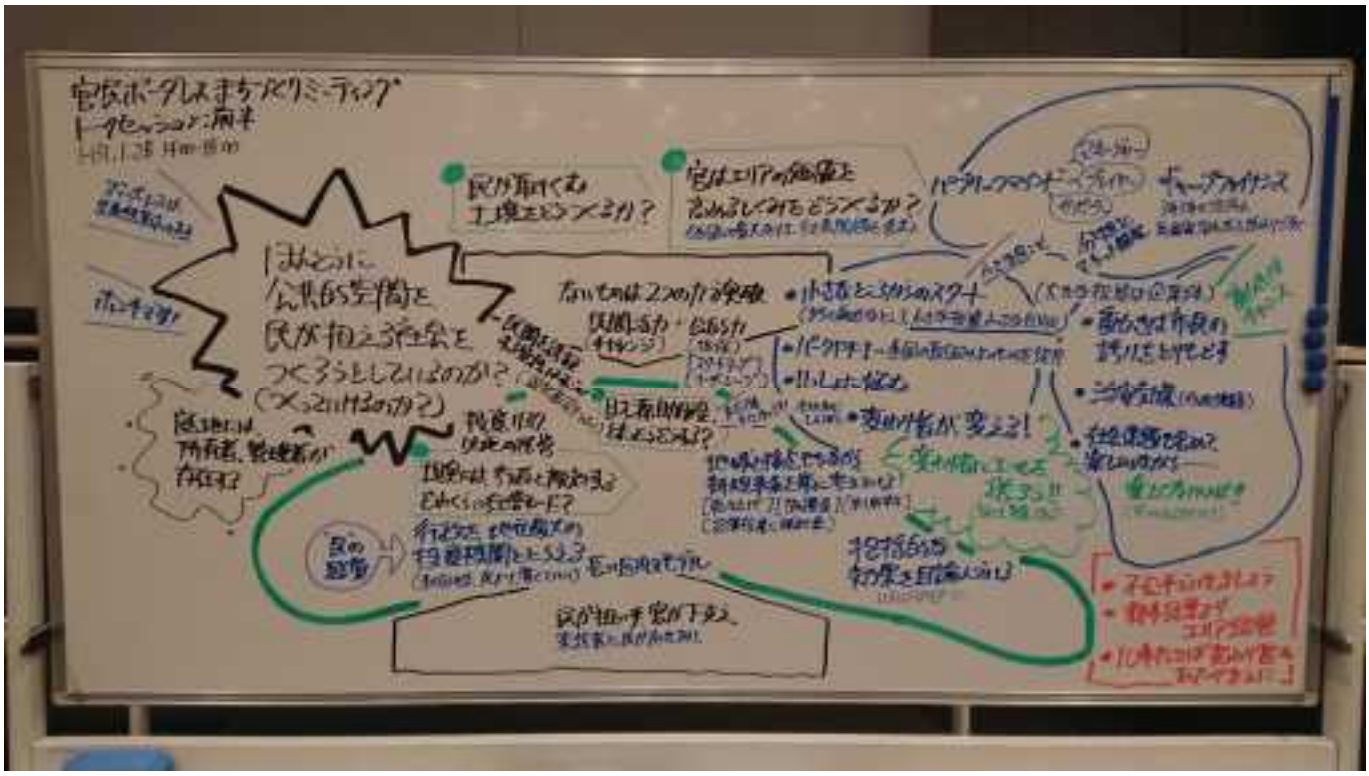
若干、感想を申し上げますと、最初のアンケートの中で、どのような方が参加しています

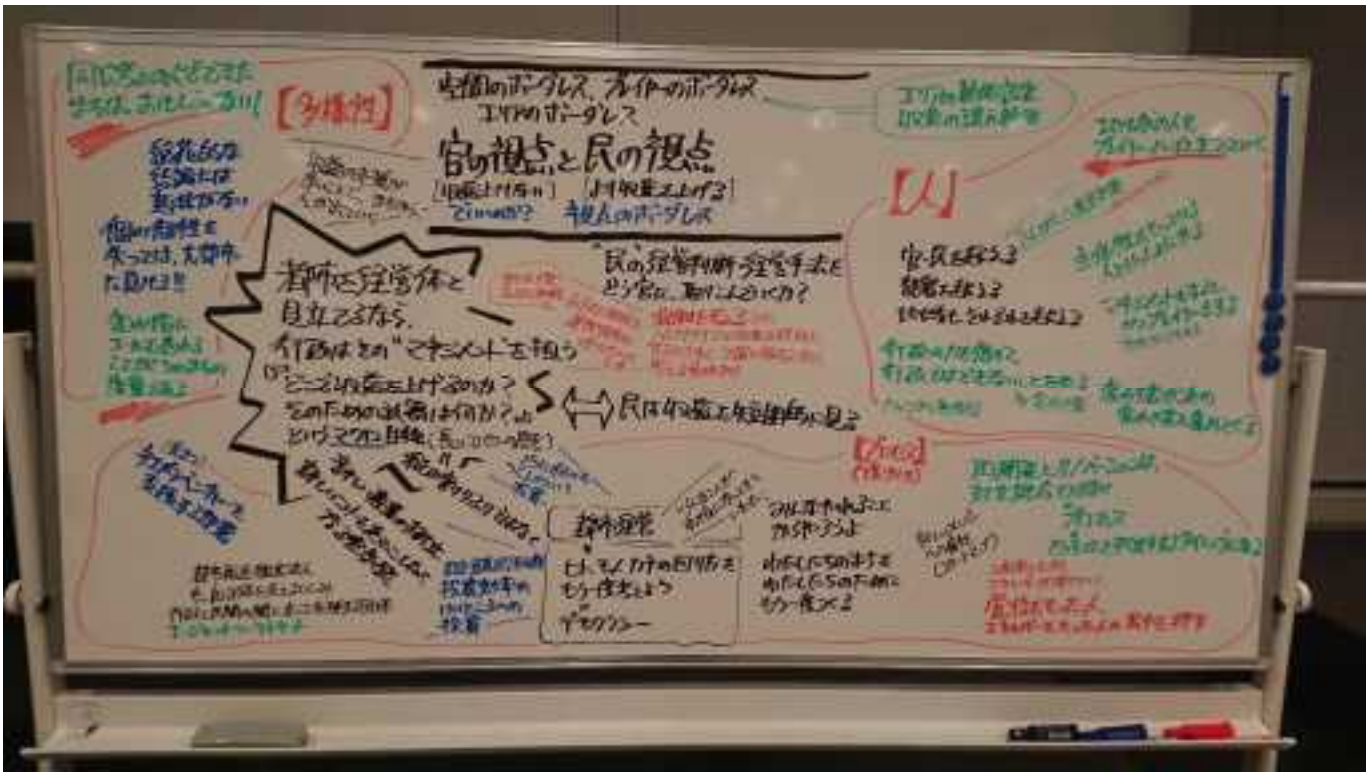
かという質問がありました。行政が 50%というところにもかなり驚きました。都市再生推進法人がベースになるから行政が多いということは、ある程度理解できるのですが、それがその後のアンケートにいろいろな影響を与えています。今日は女性が少ないのですが、実は民間のエリアマネジメント組織は、女性がかなり活躍しています。行政が 50%もいるが女性が少ないということは、一つの問題点です。

もう一つの問題点は、先ほど挙がったエリアに行ったことがない人が 50%いるということです。これは相当な問題です。地域に行って、自分の目でその地域を見るということは極めて重要で、自費でもいいから 1 カ所ぐらい行ってみましょう。そうすると、いろいろと考えが変わるはずです。行政の方は、自分の行政区の中だけにいたのでは、全くこのような新しい動きに対応できません。ぜひ、見て回ることをお勧めします。

最後に一言だけ申し上げますと、これは前回の全国エリアマネジメントネットワークの広島のシンポジウム会場で、田坂先生もこのような形で参加していましたが、そこで言った言葉なのですが、もっと不公平になりましょうということです。都市経営という言葉は、私はあまりよくないと思います。都市経営と言った途端、行政は都市全体を経営するということを考えます。そこで都市全体のガイドラインなどをつくり、中心市街地などを都市の中心だからと活性化しようとする、それには限界があるのです。そうではなくてエリア経営をする、儲かる可能性があるところに行政が投資をする、それによって民間が自由に活動をする、ということがエリアマネジメントの真髄ではないかと思います。

私は 15 年ほど前に「エリアマネジメント」という本を書きましたが、その時は誰も理解してくれなかった。都市計画をする者の中では変わり者でした。ですが、10 年 15 年たつと、変わり者が正当になる。だからまちには変わり者が必要なのです。そういう変わり者を不公平な目で見て育てていくことがこれからのまちづくりには必要なのだと思います。なかなか行政はそういったことはしにくいかもしれません。それを長い目で見てやっていっていただきたいということを申し上げて最後の閉会の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。


官民ボーダレスまちづくりミーティング
民が頑張れる土壌をどうつくるか？
官はエリアの価値をどうつくるか？
ないものは2つのかな実現
民の意識
官の視点と民の視点
都市経営体と見立てるなら、
民は何を価値と考えるか？



（7）会場の様子

＜東京会場＞

ポスターセッション開催風景（ロビー：平成 30 年指定の都市再生推進法人）

ポスターセッション開催風景（テラスルーム：平成 29 年以前指定の都市再生推進法人）

トークセッション風景（ソラシティホール）

＜札幌会場＞

＜福井会場＞

＜山口宇部会場＞

2-3 知見の収集・整理

トークセッションの内容を踏まえ、「まちづくりミーティング」開催を通して得られた知見を整理する。

（1）サテライト会場の現状について

【札幌大通まちづくり株式会社、札幌駅前通まちづくり株式会社、一般社団法人さっぽろ下町づくり社（札幌市）】

- 札幌市の都心部では、地域の特性に合わせて３つのまちづくり団体が活動している。
- 札幌大通まちづくり㈱は歩行者天国の運営管理などの道路占有を行う取組み等、札幌駅前通まちづくり㈱は札幌駅前通地下歩道空間（チ・カ・ホ）と札幌市北３条広場（アカプラ）、コバルドオリなどの施設の運営等、一般社団法人さっぽろ下町づくり社は神社を活用したマルシェイベントや下町リノベ塾の開催、さっぽろ下町サロンでのイベントの企画運営などを行っている。
- ３団体とも運営費等は補助金に頼っていない。指定管理や施設利用料、事業ごとの売上げ、地域からの協賛などをベースに運営している。

【まちづくり福井株式会社（福井市）】

- まちづくり福井㈱は、福井市が所有する屋根付き広場や多目的ホールの指定管理のほか福井市の協力を得ながらリノベーションまちづくりの取組みを行っている。
- 福井市は、新栄テラスでの官と民が土地の利用権を交換する取組みや、都市利便増進協定を活用した道路・都市公園でのイベントに関する規制緩和等について、柔軟に対応し、市民が実施するイベントの補助をしてくれている。
- 補助金は、初動期での設備投資で少し入っているが、運用での補助金はなく、施設利用料や指定管理事業費をもとに運営している。
- まちづくり福井㈱が行政とプレーヤーとの間に入って相談や橋渡しをしている。

【若者クリエイティブコンテナ YCCU（山口宇部市）】

- 若者クリエイティブコンテナ YCCU は、商店街のアーケードを一部撤去し、整備された２つのコンテナと芝生広場で、学生６名と大学教員２名、スタッフ２名で運営。
- 宇部市が全体の整備を行い、イベント企画やコンテナの運営は、YCCU と隣の POLE POLE CAFÉ が行っている。
- 芝生広場は民地であり、宇部市が借地として借りており、カフェのテナント料はまちづくり会社にぎわい宇部経由で宇部市に入る仕組みである。
- 大学は、都市計画の専門家としての立場及び行政と民間の間に立つ調整役である。
- コンテナの指定管理や運営に関するものは助成金を活用している。
- 小さな都市では、ある程度、官が引っ張って行かないと街が動かない。徐々に自立したまちづくりを目指している。

（２）官・民の関係性、それぞれの役割について

ｉ）知見の整理	
〇官は、経営感覚を持ちつつ、民の活動に寄り添う支援をする ・民の活動を支援や連携する行政の責任や、民に寄り添う組織づくりが必要。 ・民間の動き出しの勇気を持つきっかけに、助成金や補助金などの初期投資が必要。 ・官も民と同様の経営感覚（判断や手法）を持つことが望ましい。 **〇民は、助成金や補助金に依存せず、自立経営を目指すことが重要** ・助成金や補助金に依存しない、自立経営のシナリオを描くことが必要。 ・「経営モード」で活動することが、官民連携のまちづくりを実現する上で必要である。 ・目先の利益に囚われず、本気で投資する覚悟がある民間のエネルギーが街を変える。 ・エリアマネジメント組織は、そのエリアの価値を最大化する役割がある。	
ⅱ）シンポジウムにおけるパネリストの発言ポイント	
馬場氏 （(株) オープン・エー）	・沼津市の INN THE PARK は、行政から民が借地し、民が必死に経営努力をするとともに、行政も実現に向けて一緒に考え、責任も持ってくれた。 ・官が主導で進めるまちづくりからどう脱するか、民間経営にシフトするシナリオ（助成金や補助金が終わっても続くモデル）をどのように描くのか議論していく必要ある。 ・行政（官）が地元最大の投資企業となり、民間を先導していき、まちが動き出したところで民が前にでていく、そういった「自立を促す」都市経営の仕組みが鍵となる。 ・行政が経営感覚を持ってプロジェクトに投資し、その後の税収や賃貸料などを長い期間で回収するシナリオを持てれば、税金投入ではなく、ポジティブな投資に見える。
佐藤氏 （(株) バルニバービ）	・公的空間、公的スペースを活用するプロセスや仕組みを生み出すためには、チャレンジングしている「民間企業の力」とアシストする共通の思いを持った「行政の力」が不可欠である。 ・民間が、活動する勇気を持てることのきっかけに助成金や企業が投資していくべきである。補助金が民間企業を招くような誘い水になればよい。
保井氏 （全国エリアマネジメントネットワーク）	・私がエリアマネジメントの話をするときには、「マネージャー」、「プレーヤー」、「サポーター」という３層に分けて話をする。 ・まちづくり会社やエリアマネジメントは「マネージャー」の立場であり、そのエリアの価値の最大化する役割がある。これは、官と民の両側からのコミットがないと絶対にできない。
佐藤氏	・沼津市は、庁内に横断的な組織をつくり、ワンストップ窓口で民

（国土交通省）	に寄り添う取組みをしている。 ・ボーダーレスが国土交通省の生産性革命プロジェクトの一つして位置付けられ、街の魅力を高めていくために官の役割を考えながら官民ボーダーレスまちづくりを推進していく。

（3）都市経営の根幹について

ｉ）知見の整理
○都市経営の視点：マクロ的な視点が重要 ・都市をマネジメント及び経営する行政は、プロジェクトに投資することによる収益性や効果など都市経営に関してマクロ（長期、広域）的視点が必要である。 **○都市経営のプロセス：官民ボーダーレスなマネジメント組織により、新しい都市経営の視点でまちづくりを推進することが重要** ・民間の強み（テクニック、経営判断、手法）を取り入れたボーダーレスな協力関係を築いていけると良い。 ・都市再生推進法人制度や再開発とリノベーションの捉え方の理解を深めること、覚悟やエネルギーを持った人を支援するプロセスや場づくりをするなど、「やれることからやる」、「私たちの街を私たちのためにつくり直す」という「新しい都市経営」の動きが都市経営の根幹となる。 ・行政の部署や単一の企業を越えて、プロジェクト単位でマネジメントを行う組織が求められている。

ⅱ）シンポジウムにおけるパネリストの発言ポイント	
馬場氏 （(株）オープン・エー）	・行政の役割は都市を経営する側（マネジメント）であり、行政はプロジェクトに投資することによる収益性や効果など都市経営に関してマクロ的視点を持つことが必要である。 ・海外に比べ日本では官と民の人材の流動が少なく、民の経営的な判断や経営手法を都市、行政へインストールをする仕組みができていない。 ・民（プレーヤー）は、短期的に結果や収益を求めるが、都市経営では長期的なスパンでエリアを捉えてもよいのではないか。 ・都市再生推進法人は、行政や地域からベンチャーを誘発する制度の一つと考えられ、官と民のボーダーを曖昧にし、連携して現場を動かす仕掛けとなる。
佐藤氏 （(株）バルニバービ）	・まちづくりを行う団体は唱和的な結論ではなく、個性を活かした雑多性のある取組みを行うことが必要である。行政の都市経営を考えるにあたって、雑多性のある活動に対して支援すると

	いう度量や技量を持つことも必要である。
保井氏 （全国エリアマネジメントネットワーク）	・地域性を考慮しながら「やれることからやろう」、「私たちの街を私たちのためにつくり直す」という「新しい都市経営」の動きが出てきている。 ・官民ボーダーレスのまちづくりを継続していくためには、楽しいまちづくりが大事である。 ・官民ボーダーレスのまちづくりを共有するためには、「対話のデザイン」、意思決定していく「覚悟の場づくり」が必要であり、そこに向けてのプロセスをつくることがエリアマネジメントの大きな仕事の１つである。 ・今までの組織ではなく、行政の部署や単一の企業を越えてプロジェクト単位でマネジメントを行うことが行政にも求められている。
佐藤氏 （国土交通省）	・都市再生法人の出資要件はない。民間の団体が、市町村の意を汲みつつ、それぞれの地域で、マネジメントやリノベーションなどの活動が行われることで、エリアの価値が高まることで、必然的に再開発などにもつながっていく。